
真・恋姫無双 在るべき世界へ

爆裂

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真・恋姫無双 在るべき世界へ

【Nコード】

N4565S

【作者名】

爆裂

【あらすじ】

若くして逝った虚弱体質の青年の魂は在るべき世界へと帰った。外史の管理者より贈られた、健康過ぎる程健康な身体を得て。本当の生を歩む事と成った彼は、一体外史で何を見る？何を得る？答えは戦いの中か？それとも…

ブログ（前書き）

活動報告から盛り上がって調子に乗って投稿。
一応お試し的な作品です。続くかどうかは反響次第って事で。

プロローグ

「これ以上は無理…だな…。」

とある病室で全てを諦め、眠るように息を引取った青年が居た。
彼が目を閉じた瞬間から外史の扉は開かれる。

「ここは…何所だ？」

「目覚めたか。彷徨いし魂を持つ者よ。」

再び目を開ける事は無いと思っていた青年の視界に飛び込んできた場所。そこには全てが存在し、全てが無い世界だった。混乱する自分を諭すような声の主に、彼は意識を向けた。

「…貴方は誰ですか？」

「私は世界を管理し総括する名も無き存在だ。そして分かっているだろうが、君はその短い人生をたった今…終えた。」

「俺は死んだんですね。」

「そうだ。しかし冷静だな。普通はもっと動揺するものではないのか？」

「薄々気付いてましたから。」

生まれながらに身体が脆弱だった青年は、その体質から自分が長く生きられ無い事を悟っていた。それこそ成人するまで持たないと。

「一つ聞きたい。君は生前に違和感を感じなかったか？」

「違和感ですか？」

「そうだ。君が17年の歳月を生きた世界。そこに自分が存在する事自体への違和感だ。世界が自分を拒む感覚。」

「……。」

管理者の問い掛けに青年は押し黙る。

「やはりそうか。」

青年の沈黙を肯定と受け取った管理者は更に言葉を紡いだ。

「君は、君の魂は…生きるべき生まれるべき世界を間違えたのだ。否、間違えたのは我らだな。」

「間違えた？」

「そうだ。魂はその存在に見合う世界。見合う身体へと誕生する。だがごく稀にその世界にそぐわぬ魂が生まれる事がある。それが君だ。『世界からの拒絶』これが君の直接的かつ間接的な死因。」

「そんな事が…。」

まさか死んだ後にこんな続きが有るとは思ひもしなかった。青年は管理者の告げる真実に絶句した。

「済まなかったな。君には不幸な人生を与える結果になってしまった。」

「いえ…」

衝撃的事実に未だ思考の追いつかない青年は上の空で答えた。

「色々と思うところも有るだろうが、ここからが本題だ。君にはこれから本当に生まれるべき世界へと旅立って貰う。だが、君を無用に苦しめた償いに君の要望を一つ叶えよう。」

「要望？」

「ああ。何でも良い。君が生まれる世界で、君が幸福であるために必要な物を教えてくれ。」

青年は俯き思案した。ややあつて自身の望みを語る。

「健康な身体を下さい。」

「なに？それで良いのか？君が望むならば、何不自由なく暮らせる程の富も、一国の王となる地位も手にする事が出来るのだぞ？」

青年の意外な願いに拍子抜けする管理者。

「それは自分が生きて、その過程に手にするものでしょう？どんな富も地位も、それを扱う体が無ければ意味を持たない。」

「成る程な。ククク…良いだろう。その願い叶えると約束しよう。」

管理者は青年へ向けて手を翳す！

「次に君が目覚める時は、君が生まれるべき本当の世界だ！そこで成すべき事を見つけ、成すべき事を成せ！崇高な魂の行く先が、意味有るものと成る事を切に願う！」

光へと包まれた青年の魂はその存在に見合う場所へと導かれた。

「これは君の、君だけの物語だ！」

青年を受け入れた外史は、彼を祝福するかの如く一瞬の煌きを放つ。

「それにしても…全ての願いが叶うこの場所で、望むのが健康とはな。ククク…黙っていても今回は十分に健康な身体だったんだがな。しかしそれでは私の償いは果せない。良いだろう。君には最高に健康で堅強な身体を贈ろうじゃないか。」

外史の管理者は魂の行き先を見送た。その目に慈愛と期待を湛えたまま…

プロローグ（後書き）

全容の分らないプロローグでスイマセン。

ご都合主義上等！な作者なので度々逃げ口上として『これは外史ですから（キリッ』で切り抜ける所存です。

それでも読んで下さる方が居れば…いいなあ。

キャラクター設定（前書き）

ついでに乗っけとこう。

キャラクター設定

キャラクター設定

主人公

姓 煌（こう）

名 維（い）

字 蒼光（そうこう）

真名 護^{まもる}

三国志の世界に生まれる以前は17歳で他界。生来、体が弱くそこからくる合併症で成人まで持たずに死亡した。彼の虚弱体質は、魂が生まれるべき世界を間違え世界に拒絶されたため。

死亡後に外史を管理する管理者に魂を生まれるべき世界へと送られる。誕生前に要望を聞かれるが、彼が欲しかったのは健康な身体。ただそれだけ。欲のない主人公を気に入った管理者はオマケとして健康過ぎる体（人としては鍛えれば最高水準の身体能力になる）を与える。元現代人なので三国志については有名どころの名前程度は知っているが、恋姫無双について知識は皆無。

家族構成

父親

姓 煌（こう）
名 元^{げん}
字 空禅^{くうぜん}

真名 蒼馬そうま

元文官で現在は村の長を勤める。在任時は有能な文官であったが武はからつきし。むしろマイナス値。容姿は端麗なナイスミドル。若い頃は所謂草食系男子的なハンサムだった。武官で妻の悠華とは真逆のタイプで二人の結婚に同僚達は驚いた。

母親

姓 煌こう
名 遙よう
字 麗思れいし
真名 悠華ゆうか

元武官でかつては孫堅の部下として辣腕を振るった。武人ならば誰もが知る教本、武道破打本（武道ハウツー本）を執筆。夫とは執筆活動を手伝って貰った事が切っ掛けで結婚に至る。引退後も雪蓮に度々復帰を求められるが、「堅が死んだ今、自分の役目は終わった」とそれを拒否。

昔、祭に武を指南したことが有る。そのときの事を聞くと祭はトラウマスイッチが入り青ざめる。

キャラクター設定（後書き）

設定は追加するかも。

第一話（前書き）

お試し連載の第一話です。どうぞー。

第一話

この世界に生まれて約10年の歳月が経つ。物心付いた頃にはかつての自分、生まれ変わる以前の記憶が戻った。

虚弱な身体を引きずり歩んだ17年。その死の後に導かれた、本当に在るべき世界。

そうだ。俺はやつと自分の生きるべき世界へと生まれたのだ！

やるぞ！不遇の17年さえも糧にしてこの世界を生きてやるのだ！

そしてこの世界に生まれた10年で分かった事が幾つかある。先ずは管理者を名乗った者との約束について。健康体を貰った俺はそれを確認するべく、とにかく動いた。村中を駆け巡り、走り回る。

スバラシイ！ワンダフォー！ファンタスティック！

激しい運動でも痛まない心臓。多少の打撲などでは折れない強硬な骨格。怪我也簡単には化膿せず、急な気温差でも風邪を引かない。

まさかこの俺が健康優良児の称号を得るとは！

次に知ったのは俺を取り巻く環境と状況だ。これには驚いた。どうやらここは中国大陆。それも前世より大昔の。何故それが分かったのか？簡単だ。両親の話題に度々出る人物の名前が、元現代人の俺の知る有名人だったからだ。

孫堅文台。

三国志なんて有名どころしか知らない俺でも分かる。呉の礎を築いた『江東の虎』なんて、おっかない渾名を持った英傑だ。両親はそんなお方の臣下として結婚前まで仕えていたそう。

つまりここはアレだ。所謂乱世。群雄割拠の激動の時代という訳だ。

…ふざけるなよ！

病死の次は戦死に怯えろ！？こうなったら何が何でも寿命まで生きてやる！

幸い健康な身体で生まれて来れたんだ。武も知も磨いて乱世を生き抜く。目指せ大往生！

「護。お前も十歳だ。そろそろ武術の鍛錬を始めても良い頃合だ。」

庭先で槍を持つて俺の前に立つ女性が居る。精悍な顔立ちながら、決して美しさも損なわれていないこの美女が我が母上、煌麗思じつれいしである。真名は悠華ゆうか。

真名というのは、呼ばれる本人が認めた人にだけ与える呼び方で、許可無くそれを使うと殺されても文句は言えないのだそうだ。おっそろしい習慣だねえ。因みに『護まもる』は俺の真名だ。何の因果か生前の本名と同じだが、混乱せずに済むので好都合だ。

さて、母さんについてだが、現役当時は『江東の牙』と呼ばれ孫堅の忠臣として名を馳せた名将だそう。在任中に執筆した教本、武道破打本（武道ハウツー本）は諸外国でも武人ならば一度は読むべストセラーとなっている。

ただこの話を聞くと最後は必ず惚気話になる。執筆を手伝ったのが父さんで、それをきっかけに二人は結婚に至ったからだ。

「護、今日からお前に武術の手解きを行う。何か質問は有るか？」

「いや、無いよ。宜しくお願いします。」

乱世のこの時代を生き抜くなら武術は必須だ。それが江東の虎の元腹心ならこれ以上の師は居ないだろう。

「そうか。では掛かって来い！」

そう言つて槍を構える母さん。オイ、ちょっと待て。

「いやいや！母さん俺、まだ何も教わつて無いよね？いきなり模擬戦とかおかしくない？」

「問題無い。これは現時点でお前がどれだけやれるのかを見るためのものだ。それ如何によつて教え方を考慮するつもりだ。遠慮せずに掛かって来るのだ！」

「俺丸腰なんですけど？」

「馬鹿め。護、人が生まれて最初に手にする武器はその拳だ。無手が不利など考えるのは、武器を持つ人間の驕りではない。」

「じゃあ、なんで母さん槍なんだよ!？」

「これは私の趣味だ!」

「理不尽だ!」

「問答無用!!」

「ぎゃあああああー!!」

俺は襲い掛かる母さんの斬撃を命からがらかわすのだった。

悠華サイド

息子の護が今年で十歳となった。あの子は最初から歳の割りに精神的にも大人びていた。いつの頃からか村長である夫の仕事を手伝うようになり、その手腕と発想は他に類を見ない。大人顔負けの聡明さから、村では息子を神童と呼ぶ者も居る。

しかし夫ばかりが護に指南するというのは癪だな。私もあの子に伝えるべき武がある。そろそろ成長も進み、身体も出来上がりつつある。私の武術の粋を護に仕込むとしよう。…決して夫が羨ましかった訳では無いぞ。…たぶん。

力量を見るためにまず最初に模擬戦を仕掛けた。あの子がどこまでやれるのか興味はあったが、そこで私は驚嘆した。齡十ほどの子供が手加減しているとはいえ、私の攻撃をかわしたのだ。繰り出す乱撃を避けつつ、あまつさえ反撃の機会を窺っている。

自分が同じ年頃にここまでの動きが出来ただろうか？無理だ。間違いない無く護は私を超える才を持っている。

フフフ：嬉しいではないか。江東の牙と謳われた私さえも超える才能を持つとは。さすがは私と蒼馬の息子だ。蒼馬譲りの知力と私以上の武。これを兼ね備えた護は歴史に名を残す傑物と成るだろう。

護。私が必ずお前を最強かつ最高の英傑に育ててやるぞ。

護サイド

母さんとの地獄の修行から五年が経ちました。今ではなんとか俺が勝ち越すようになったよ。ここまでに至るのは大変だった。早く力を付けようと筋トレなんかを修行に取り入れたんだが、この時代はスポーツ医学の概念が無いので、俺の鍛錬が他の人には奇行に見えるらしい。母さんまで白い目で見るので筋肉の超回復の仕組みについて説明した。最初は半信半疑だったが、俺の成長度合いを見て納得してくれた。

バーベル代わりに大岩を担いでいる姿がよっぽど変だったんだな。

ある日、いつもの日課となった筋トレを終えると母さんが俺を呼んだ。

「護、今度私と父さんが仕えていた孫家のご息女とその部下がやってくる。」

「また勧誘？」

実は今までも何度か孫家からは使いがやってきていた。向こうは余程母さんにご執心な様で、度々武官として母さんに復帰を打診していたのだ。

「うむ。私としては堅の死んだ今、この国での私の役目は終わったと思っっているのだがな。しかし向こうも今回は本腰を入れて復帰を求めるだろう。何せ後を継いだ『娘』の孫策自身がやってくるというのだからな。」

「なるほど。って孫策！？」

態々あの孫呉の小霸王が母さんに会いに来るのか！？

「うん？何だ気になるのか護？」

驚いている俺の態度に、母さんは何処か茶目っ気のある笑みを浮かべた。

「フフツ、お前も女性を気にする歳になったか。母親の堅もかなり

の器量の持ち主だったが、娘の孫策殿も堅に似た美しい女子だぞ。」

「へ？女子？」

聞き間違いであろうか？俺には母さんの口振りでは孫策が女性である様に聞こえた。

「ん？何を呆けている？孫策殿が女子では何かおかしいのか？」

おかしいです。孫策が女性？俺の浅い知識でも三国志の孫策は男性のはずだ。そして母さんは言った。『母親の堅も』と。

「あの、つかぬ事をお聞きますが、孫堅様も女性：だよね？」

「何を今更。」

当然とばかり頷く母さん。孫堅、孫策が女性？もしかしてこの世界では三国志の登場人物は皆女性なのか？そうだとしたら俺の知る史実とは異なる世界だ。つまりはパラレルワールド。平行世界。人生をやり直すという経験したせいなのか、突拍子も無い事でも納得してしまう自分が居る。まあ、その二人が例外という可能性も捨てきれないが。

「ともかく孫策殿は私の元主で友だった堅の娘だ。会うときも失礼の無いようにな。」

「ああ。分かったよ。」

孫堅様を呼び捨てな母さんより失礼になることは無いと思うんだけど。

「私は良いのだ。」

言っていないよ!?

「顔に出ているぞ。」

第一話（後書き）

という事で主人公と雪蓮の接触フラグをおっ立ててみました。
感想はお手柔らかに（汗）。

第二話（前書き）

呉のアダルト組が登場でDEATH。

第二話

雪蓮・祭サイド

護衛を連れ、煌夫妻の隠居した村を目指す二人の女性が居た。雪蓮と祭。馬上で今回の旅の目的について話し合っていた。

「今回はなんとか悠華を口説き落とさないと。」

「ふむ…度々使いを出しては居るものの、色好い返事は貰えず仕舞いですからな。」

「今は袁術ちゃんの客将でも、いずれ私達孫家が独立する機会がやってくるわ。その際にあの人の武が必要になる筈よ。」

「しかし、あの遙殿が簡単に折れるとは思えませんがの。」

祭にとっては悠華は元上司であり武の師でもある。彼女の頑固さと思いの強さは、数回顔を合わせただけの雪蓮よりも良く分かっている。彼女を説得出来るとしたら、それは亡き孫堅ただ一人だろう。

「確かに簡単には行かないでしょうね。それでも私はあの人の武が欲しいのよ。」

「気持ちとは分かんでもありませんがな。」

雪蓮は昔、何度か悠華と会っている。母に紹介されたときに一度手合わせをしたのだが完敗だった。

母親の孫堅以外にああも容易く負けた事は無かったため、その時の

記憶が強烈に脳に焼き付いている。

それはある種の憧れと言っても良いだろう。

「と…見えてきましたな。」

視線を向けた先にある村。その門の前で手を振っているのは二人が目的とする人物だった。

「お久しぶりですな。遙殿。」

「本当だな。祭。雪蓮も綺麗になった。」

「ふふつ。悠華こそ。以前に会った時と全然変わってないわ。」

軽い挨拶を交わし、兵に野営の準備をさせると二人は悠華の家へと向った。

「それで、やはり目的は私の復帰か？」

家に着くと茶を飲みながら一息付いたところで先手を取ったのは悠華。

「やっぱり分かるわよねえ。」

「あれほど頻繁に便りを送られてはな。さすがに馬鹿でも気付く。」

「一応返事を聞きたいのだけれど？」

「分かっているだろう？否だ。何度も言うようで悪いが、私の役目は堅が死んだときに終わったのだ。」

「やはりのう。」

分かっていた祭は諦め混じりに相槌を打つ。

「堅が娘であるお前達に自分の意思を託したように、私も次の世代に自分の意思を託した。これからはお前達若者の時代だ。」

「私はそういう歳でも無いのですがのう。」

「何を言う祭。お前はまだ……」

「わーわー！！遙殿！そこは勘弁して下さい！」

「ふむ……女性のみでも年齢の話は禁句か。配慮が足らなかったな。すまん。」

終止話しは悠華のペースで進んでいく。これは口説き落とすのは難しいと考え、雪蓮は少し話しの矛先を変えてみた。

「悠華も次世代に託したと言ってたけど、それは？」

「ああ。息子の事だ。今年で15になる。あと二、三年経ったら旅

に出して見聞を広めさせようと思っているが…。そうだな…ふむ、もはや私が戦場に赴く事は叶わぬが、息子ならば二人と共に戦場を駆ける日が来るかもしれぬな。」

「遙殿の息子がのう。」

「確かに面白いわね。母様の右腕だった悠華の子が、今度は私の右腕になるってのも。」

（ふつ、計画通りだ。雪蓮の興味は護の方に移ったな。）

悠華は厄介ごとを護に押し付ける事が出来たと、内心ほくそ笑む。

「何なら今から紹介しよう。この時間ならば鍛錬の為に村外れに居る筈だ。」

「ええ。お願いするわ。」

「ふふつ…まあ無理だとは思うが、その場で口説き落とせばそのまま持ち帰っても構わんぞ?」

挑発的な物言いで雪蓮の自尊心をチクチクと刺激する。

「へエ…言っわね。」

「しかしこ子息はまだ15の少年であろう?」

「フン。我が息子をただの少年と侮るな。あの子の武は既に私を超えている。」

「なっ!？」

さらりと衝撃的な事実を暴露した悠華に、目を剥く祭。

「それはさすがに…。」

「身内の欲目だとも言うか？この私が。」

戦場で自身の力量を見誤る事は死に直結する。誰より戦を知る悠華がそんな轍を踏む訳が無い。

分かつてはいる。だが、高だか15の少年が悠華よりも強いなどとは到底信じられない。それほどまでに悠華の力量は抜きん出ているのだ。

「『江東の牙』にそこまで言わせるなんてね。ますます興味が湧いたわ。けど悠華？もしも期待外れだったときには…」

「分かっている。お前の傘下に加われというのだろうか？」

「」名答「」

我らが主人公、護の与り知らぬ場所でもない密約が交わされていたのだった。

「居たな。あれが我が息子、煌 蒼光だ。」

村外れの広場にて、鍛錬に励む護を指差す悠華。

「あ、あれが…。」

「何よあれ…。」

二人は広場での少年の奇行に啞然とする。

「よ、遙殿…ご子息は何をしているのですかな？」

遠巻きに見える少年は逆立ちし、足で巨岩を持ち上げていた。

「奇異に見えるだろう？しかしアレこそが護の鍛錬なのだ。」

「どう見ても拷問か苦行にしか見えないわ。」

このままでは二人にとって護はただの変人となってしまう。息子を憐れむ悠華が彼を擁護する。

「二人は超回復という言葉聞いた事は有るか？」

「いや…」

「知らないわね。」

「であろうな。私も息子に聞くまでは知らなかったからな。あやつが言うには人間の筋肉は疲労した後、回復時にほんの少しだけ元の筋力よりも回復する。これを超回復といって、積み重ねることで筋肉の総量が増加するのだそうだ。そして負荷が大きい程に力も伸びる。まったく、何処で聞いてきたのだから。」

苦笑する悠華だが、他の二人は未だに懐疑的だ。

「本当に効果があるの？」

「ある。護の成長を見てきた私が言うのだから間違い無い。」

ここまではっきりと悠華が断言するのだから事実なのだろう。超回復については一先ず置いておき、話を進める事にした。

「悠華、取り敢えず息子さんを紹介してくれるかしら？」

「良いだろう。護！こっちへ来い！」

第二話（後書き）

ハアハア… 良いよね祭さん。彼女の胸にルパンジャンプしたい。

第三話（前書き）

チヨイ戦闘シーン有り。まあ、大したことは無いんですけど。

第三話

「護！こつちに来い！」

日課である筋トレの最中に母さんが俺を呼ぶ。隣には見たことの無い女性が2人。スゲー美人。どちらもこの辺りでは滅多にお目にかれない程綺麗な人だ。

ドスウン！

担いでいた岩を降ろすと、汗を拭きながら3人の元へと歩み寄る。

「護、こちらが私が仕えていた堅の娘で孫策だ。もう1人が私の元部下で黄蓋だ。」

そついや来るって言ってたな。やっぱり女性だし。

俺は小霸王が予想以上の美女である事に、面食らいながらも挨拶をする。

「初めまして孫策様。煌遙の息子の煌維といいます。字は蒼光です。」

「孫策よ。字は伯符。貴方が悠華の息子の煌維ね。」

「儂は黄蓋という。字は公覆じゃ。」

隣の女性も綺麗だ。母さんの元部下か。この人も有名な英傑なんだろうな。しかもデカイ。母さんに負けず劣らずの立派な双山の持ち

主だ。

「早速だけど煌維。私と戦って貰うわよ。」

「は？俺が孫策様とですか？」

ホワイ？

「私達、貴方の母様を勧誘に来ただけけど、中々頷いて貰えないのよ。それに今じゃ貴方の方が強いって言うじゃない？」

そりゃ最近では勝てるようになったけどさ。

「けど何故俺が戦う事に？」

「貴方が期待外れだったら悠華が武官になってくれるって。力量を量るには戦ってみるのが手っ取り早いでしょ？」

「また勝手な事を。」

俺は頭を抱え、ジト目で母さんを睨む。

「手加減してやれよ護。さすがに孫家の姫…いや、もう当主か。ともかく嫁入り前の女性を傷物にするのは拙いからな。」

呆れる俺など意に介さず、むしろ火に油を注ぐ母さん。

「うふふ…この私に手加減前提なんて、良い度胸ね煌維？」

言ってねーよ！

「一応刃を潰した剣を用意しておいたぞ。」

そそくさと試合用の剣を渡す。準備良いなオイ。

「護よ。」

剣を渡す際に母さんが俺に耳打ち。何か助言かね母上。

「いつそ傷物にして、責任を取る形で嫁にしても構わんぞ?」

助言じゃねー。

「ん? 不服か? あの娘はこれから更に綺麗に成るぞ。母親を知る私が言うのだ。間違い無い。」

「いやいやいや! そうじゃないでしょ!」

「何だ? もしや祭の方が好みだったか? ならば両方とも娶ってしまえ。祭は少々とうが立っているものの気の利く女だぞ?」

この美人2人が俺の嫁……って違う違う!

「私も些か老いたからな。なるべく早く孫の顔が見たいのだ。」

そう言つて、わざと咳き込み2人に衰えをアピール。貴女この前1人で賊退治してたよね?

「準備は良いかしら?」

「勿論だ。」

俺は答えて無いよ？勝手にこの人が。

「行くわよ煌維。勝負！」

始まっちゃった。

雪蓮サイド

母様の右腕として名を馳せた煌遙。江東の牙とまで呼ばれた彼女に自分を超えたと言わせた煌維。その力を見せて貰おうじゃない。

もし期待外れでも悠華の協力を取り付けられるし、分の悪い賭ではないわね。

「行くわよ煌維。勝負！」

手加減なんかさせない。その悠華に勝る武、引き出してあげる！

「ハアアアッ！」

煌維が構えるより速く剣を振り上げる。乗り気じゃ無いみたいだけど、ここは強引に行って勝負にさせる！

「ふっ！」

ガキイイーン！

煌維は素早く剣を取り私の斬撃を受け止める。

「ヤアアアアー！」

ガキッ！ガキイイイ！ガッ！

繰り返す攻撃を剣で受け続ける煌維。

「ほらほら！受けてばかりいないで反撃しなさい！！」

「ハア…分かりました。ここまで来たら決着がつくまで終わらないでしょうしね。」

煌維が初めて自分から武器を構えた。

「行きますよ。…はあああっ！！」

ガキイイイイイツ！

「ぐうつ…」

重い！なんて威力なの。受けた剣ごと身体が吹き飛びそうになる。

「てやあああ！！」

ガガッ！バキッ！ギーン！！

速過ぎる！反撃が追い付かない！

猛攻を防ぐので精一杯。煌維が攻撃に転じただけで流れがひっくり返ってしまった。そして防戦一方になりながら私は気付く。煌維は本当に手加減している。彼の剣は私を狙わずに、私が構える剣のみを標的にしているのだ。けど、それが分かっているにしても反撃の糸口が見つからない。

「足元の注意が疎かですよ。」

「えっ！？しまった！」

ドサアッ！！

剣に意識を取られた隙に足を払われる。慌てて体勢を整えようとしたり私の眼前へ、剣の切っ先を突き付ける煌維。

「まだ続けますか？」

「いいえ…完敗よ。」

煌維の問いに私は頭を振る。正直このまま続けてもまったく勝ち目が見えてこない。これで手加減しているんだから凄まじいわね。

「怪我はありませんか？」

心配した煌維が私の顔を覗き込みながら手を差し出します。

「ええ。大丈夫よ…。」

そうだわ。これはあの時と同じ。私は昔悠華に負けた時と同じもの

を煌維にも感じた。

護サイド

何とか穏便に勝負を終わらせたと胸を撫で下ろす。

「怪我はありませんか？」

一応剣を狙ってたから心配はなさそうだが、未だに尻餅をついたままの孫策様に手を差し出す。

「ええ。大丈夫よ……。」

俺の手を取って起き上がると孫策様は残念そうに溜息を洩らす。

「あーあ。負けちゃったわ。」

「うむ。遙殿に聞いてはいたが、ここまでやるとは。」

何か釈然としないけど、これで賭けは俺と母さんの勝ち。母さんが武官に成ることは無いはずだ。

「どうだ二人共、我が息子の力は。これで賭けは私の勝ちだな？」

思惑通りなのだろう。腹立つくらい笑顔な母さん。元はといえばこの勝負も母さんの差し金だ。

「あんた何もしてないでしょうが。」

「何を言う。息子の勝ちを願い、固唾を吞んで勝負を見守ったというのに。」

いけしゃあしゃあと言いやがって。

「確かに私の負けだし。もう悠華の事は諦めるわ。」

約束を違える事無く頷く孫策様。潔い人で助かる。

「けど、代わりに煌維！私は貴方が欲しいわ！」

ピシッと俺を指差す。

「何故そうなる！？」

「うふふ、既に悠華には許可は取ってあるわよ。口説き落とせたら持ち帰って良いってね。」

俺はお土産じゃねー。

「母さん？」

「はて、そんな事を言ったような…そうでないような？」

母さんは忍び笑いを隠しながら、曖昧に言葉を濁す。

「孫策様、俺はまだ若輩者なんで仕官とかはまだ考えてないんですよ。」

「雪蓮と呼びなさい。それに悠華より強いんだし問題無いでしょう」

「？」

「今日初めて会った人間に真名を預けんで下さいよ！」

「ねえ… 良いでしょうか？一緒に来れば後悔させないわよ？心配しなくても、私がイロイロ教えてあげるから…。」

「胸を押し付けしないで下さい！」

「いいぞ雪蓮。護はウブだから色仕掛けには弱い筈だ。」

「アンタはもう黙っててくれ！！」

雪蓮との初対面の翌日、俺は母さんは二人を見送る為に村の入り口に居た。

「それじゃ護、仕官したい時は必ず私のところに来るのよ。良いわね？」

「分かった分かった。」

結局真名は受け取る事になって敬語も止めさせられた。そうでもないとなんか攫われそうだったのだ。

「悠華も元気だね。」

「ああ。雪蓮もな。護は二年後には出奔させるつもりだ。それまでに女を磨いておくが良い。」

「ええ。次は必ず籠絡してみせるわ。」

まだ言ってるよこの人達。もう二人はほっところ。俺は祭さんと挨拶を交わす。

「護、お前の武は素晴らしいものがある。このまま道を違える事なく努めるんじゃないぞ。」

「はい。祭さんもお元気で。」

この人はまともな挨拶でほっとする。

「それと…もしも策殿で不満ならばわしが相手でも構わぬぞ?」

あ、貴女もですか祭さん…。

雪蓮・祭サイド

煌親子と別れた二人。目的は果たせなかったものの、道中の雪蓮は終始笑顔だった。

「うふふ、悠華の事は残念だったけど思わぬ収穫があったわね。」
「まさか遙殿の子があれほどの武芸者であるとは思いませんでしたの。」

「本当ね。もしかしたら護は大陸一の達人かもしれないわ。」

「岩を担いで逆立ちしていた時には、呆れましたかのう。」

祭はまったく大した物だと思う。

父親に似た柔和で優しい雰囲気と、悠華譲りの武芸の才。まるで両親の個性を良いトコ取りしたような少年だった。後に悠華から聞かされた息子の自慢話によると、頭の方も冴えるという。村の畑について護の助言を実践したところ、収穫量が二倍にまで増えたというから驚きだ。この辺りは文官として有能だった父親の血だろう。

「結局、策殿は真名まで許してしまわれて。」

「何よー。それは祭も同じでしょう?」

「はっはっは。私にとって護は弟子のようなものですからな。」

雪蓮が真名を呼ばせる事を執拗に迫ったとき、それに乗じて祭も護に真名を預けたのだった。

「しかし策殿、帰ってから覚悟されよ。」

「ん?何かあったかしら?」

「公瑾に仕事を全て押し付けて来たのでしょうか?説教は覚悟された方が良いでしょう。」

「そ、それは確かに怖いわね…。」

悠華の説得に行く祭に、雪蓮は強引に付いてきたのだった。仁王立ちで待ち構える親友を想像して身震いする雪蓮。

「…やっぱり護を連れて帰るべきだったわね。」

「確かに護ほどの者を連れ帰れば言い訳も立ちそうですが、約束を破る訳にも行かぬでしょう。大人しく怒られるが宜しい。」

第三話（後書き）

原作キャラのしゃべり方ってこれで合ってるのかな？

多少の差異など気にしない。

それが俺達の合言葉。『外史ですから』（キリッ）『

さて…この後どうしよ？

第四話（前書き）

振り返れば『ヤツ』がいる。

第四話

「腕を前から上げて、大きく背伸びの運動！イチ！ニ！サン！シ！」

「「「イチ！ニ！サン！シ！」」」

村人を前にして俺の号令でラジオ体操の最中だ。

腰痛や肩こりに悩まされている村の老人達にこれを教えたところ評判になり、今では村の殆どの人間がこれを実践している。

早朝の空気は気持ち良い。日々の健康は毎日の習慣からなのだ。

「煌維の兄ちゃんハンコちょうだい！」

ラジオ体操が終わると、村の子供達がハンコを求めて俺の前に並ぶ。若年層にもウケるように参加者へのハンコ制度も取り入れてみた。ちなみに皆勤賞を取ると一日だけ畑仕事を俺が手伝うという報酬が付いてくる。

「はい。次の人ー。」

「あらーん！私い？何だかドキドキしちゃうわん。優しくしてねえん！」

「げえ！？」

キモチ悪いオネエ言葉を発して俺の前に立っていたのは、ピンクの紐パン一丁のムキムキマツチョなオッサンだった。

「きゃー！」

「へんたいだー！」

「こわいよー！おかーさん！」

蜘蛛の子を散らすように逃げていく子供達。

「むうっーん！！失礼しちゃっわ！誰が一目見ただけで頭痛と嘔吐が一生止まらない不快の権化ですってえ！？」

「そこまでは言っただけよ！」

「ご立腹なマツチヨさんだが、既に子供達は居なくなってしまった。

「あらん？それにしても貴方…何だか不思議な匂いを感じるわねえ。

」

そう言っただけ俺の顔を覗き込む。

「スンスン…んうー！」

「キモイッ！！！」

「ドゴッ！」

「ゲフッ！」

途中から唇を尖らせて近付いてきたオッサンの顔を殴り飛ばす。

「酷いわん！漢女の顔を殴りつけるなんて！」

「匂い嗅ぐだけでも不快なのに唇近づけるんじゃないやねえよ！」

前世も含めた人生初キスがこのオッサンとか、軽く100回は死ねる。

「大体、お前誰だよ。この村の人間じゃないだろ？」

「むふん。私は貂蟬。旅のしがない踊り子よん。」

ウザい。しかも貂蟬だと？三国志の代表的な美女がコレとか何の悪夢だ。男のはずの孫策であれだけの美女だから貂蟬には期待してたのにつ！

「護、何を騒いでいる？」

他の村人と談笑していた母さんが騒ぎを聞きつけやってきた。

「ん？お前は…」

「あらーん！煌遙ちゃんじゃないのお。お久しぶりねえん！」

「やはり貂蟬か。」

「煌遙ちゃんは相変わらず綺麗ねえ。」

「お前も相変わらずのキモさ加減だ。」

「いやん。そのはつきりとした物言いがス・テ・キ。」

「母さん、コレと知り合いなの？」

俺は未だに身体をクネらせる不快な物体を指差す。

「うむ。コイツは名を貂蟬と言ってな。私の恋敵だった者だ。」

「そうよん。私と煌遙ちゃんは昔、煌元ちゃんをめぐって戦った恋のラ・イ・バ・ルなよう。」

「あの頃は私も若かった。夫をめぐってコイツとは闘争を繰り返したものだ。まあ、最終的には私が全裸で夫の閨に襲撃を掛けた事で闘争は終結したのだがな。」

昔を懐かしんで遠い目の母さん。そんな馴れ初め知りたくなかったです。

「あの日の夜は私も一晚中枕を濡らしたわん。よだれで。」

せめて涙にしろ。

「それで今日は何のようだ？言っておくが私達夫婦は今も熱々なのでな。お前に入る余地は無いぞ。」

堂々と息子の前で惚気ながら用件を聞きだす母さん。貂蟬も話を促されてようやく本題に入った。

「今回はお使いみたいなものでねえ。私の上司に頼まれて、煌遙ちゃんの息子さんに会いに来たってわけよう。」

「そうか、ならば丁度良い。紹介しよう。これが我が息子の煌維だ。」

紹介しないで欲しかった。母さんは俺の肩に手を置き、貂蟬に俺を紹介する。

「成る程ねえ。確かにどこと無く雰囲気は煌元ちゃんに似ていると思っただわん。」

「ハア…それで俺に何の用があるっていうんだ？」

こんな珍妙な生物と関わりの有る知り合いなんて居ないと思う。

「貴方にコレを渡すように言われたのよん。」

「これは……刀か？」

貂蟬に差し出されたのは、黒いうるし仕立ての鞘に納まった剣。この大陸では見たことの無いもの。だが日本人なら直に見分ける事の出来る武器。日本刀だった。

「私の上司が貴方につてね。」

「けどこんな物をくれる人に心当たりが無いんだけど。」

「上司は『管理者』って言えば分かるって言ってたわよう？」

「…っ！」

それは俺に新しい人生をくれた彼のことだろう。この貂蟬といい、何者だろうか。

「銘は『蒼天竜牙』切れ味も中々だけど、一番の特徴は丈夫で壊れ無いことよん。」

「ほう。それは確かに護向きの武器だ。他の武器では護の馬鹿力に耐えられんからな。」

確かに母さんの言う通りだ。

賊退治に付き合わされては毎回武器を壊すので、武器を持たせて貰えなくなってしまった。なので最近は専ら素手での戦闘ばかりだったのだ。

「この剣には鉄を打つ際に竜の牙が混ぜてあって、そのお陰で折れる事は無いそうよん。」

竜の牙にどういう効果があるのか分からないが、管理者である彼に常識は通じない。彼がそう言うならその通りなのだろう。有って困る物でもないし、ありがたく受け取ろう。

「おい。二人とも。そろそろ朝飯にしようや!」

俺が貂蟬から刀を受け取った直後、父さんが家から顔を覗かせる。

「キュピーン! あらあ、煌元ちゃんじゃないお久しぶりね!」

「げえ! 貂蟬! なんでお前がここに!?!」

貂蟬の顔をみるなり青ざめる父さん。対する貂蟬は目をギリリと輝かせる。

「むふうーん！今こそ私の熱い滾りを受け取ってもらわん！」

「ぎいやー！ー！ー！ー！たーすーけーてー！！」

全速力で逃走する父さんを追いかける貂蟬。二人は村の果てへと消えていった。

「良い物を貰ったな護。大切にしろよ。」

「それより父さんは放っておいて大丈夫なの？」

「心配要らん。蒼馬は逃げ足だけは超一流だからな。江東では『逃げの煌元』の異名を取った程だ。」

何て不名誉な渾名。そして何故そんな父さんとこの人が夫婦なのか。それが一番の謎だ。

男勝りな女性と乙女を偽装(?)するオッサンの二択なら答えは言わずもがなだろうがな。

第四話（後書き）

という訳で主人公に武器を持たせてみた。そして漢女…

第五話（前書き）

護君の旅立ちです。

第五話

「護、そろそろ出て行け。」

「はい？」

夕食後の食休みに寛いでいるところで、突如投げ掛けられた言葉に首を傾げる。

「母さん、いきなり何を？」

「ああ、済まない。出て行けは少々語弊があつたな。つまりお前も17になった事だし、そろそろ見聞を広める為に旅に出てはどうかという事だ。」

「成る程。」

以前にもそんな事を言っていた様な気がする。

「旅は良いぞ。私が蒼馬に初めて会つたのも旅の途中だった。訪れた村を賊が襲つてな。二人で退治したのだ。」

「正確には俺を囷にして悠華が賊を撃破したんだがな。」

母さんの大雑把な回想に父さんが注釈を入れる。

「だが、蒼馬の走りっぷりも中々凛々しかったぞ。」

「それを言つたら悠華の立ち回りは雄雄しかったなあ。」

「…廁に行つて来るよ。」

互いを褒めあつて、イチャ付き始める前兆を感じた俺はさつと居間から抜け出した。

「旅か…。」

廁への帰り道、俺は一人呟く。

前世では狭い病室が俺の唯一の居場所だった。

それが生まれ変わってからはこの家と村。そして次は…？

「確かに俺の世界は広がった。この世界が本当に俺の在るべき世界なら、もっと遠くまで行ける筈だ。」

見上げた先にある星たちは、まだ見ぬ場所でも同じ様に輝いているのだ。

世界から拒まれる事も無く、丈夫な体も得た今、行けぬ道理は有りはしない。

「生きたいように生きられるのなら、遠慮するのは損つてもんだよな。」

この世界の星は、嘗て病室の窓から見たものとは比較にならない程

多く、そして明るかった。

「忘れ物は無いか護。」

「大丈夫。それじゃ行ってくるよ。」

旅立ちを決めてから三日後、俺は村の入り口で両親と村の皆に挨拶していた。

「煌維の兄ちゃんががんばってね!。」

「お土産よろしく!。」

「おう。行ってくるよ。」

見送りには村の子供達も居た。俺は全員の頭を撫でると振り返り、街道へ向けて歩き出す。

「気を付けてね!。」

村人達は俺の姿が見えなくなるまで手を振ってくれていた。

「お？こりゃ派手にやってるねえ。」

村を出て約十日程が経ったところで小さな農村を見つけた。そろそろ食糧の補給をしようと思ったのだが、どうもそんな場合では無いらしい。

直ぐ近くでは何やら戦闘が繰り広げられており、中心では一人の女性が槍を振るっている。

「テヤアーーーーー！！！」

ブシッ！ドゴッ！

「ぐはっ！」

「がふっ！」

自身を囲む敵を次々に葬っていく女性。村人達も彼女を援護している事から、敵が賊である事は容易に想像出来る。

「俺も行くとしますか。」

丘の上から状況確認を終えた俺は、愛刀を携え騒動の中へと乱入した。

ズバッ！

弓矢で女性を狙っていた賊を切り捨てる。

「だ、誰だ！ぐあっ！」

「くそっ！新手か！？」

賊の動揺を他所に、俺は女性と敵の間に割り込む。

「助太刀するぞ！」

「ありがたい！」

「はっ！優男が一人増えたただけだ！構わねえ！殺っちまえ！」

頭目と思しき男が手下にはっぱを掛ける。

「お主、腕に自信は？」

「この程度の雑魚ならお釣りの方が多い位だよ。」

「ほう、それは頼もしい！」

女性はニヤリと笑い、再度武器を構える。俺達は襲い来る賊を迎え撃った。

「先ずは指揮官を倒して、統制を崩す。」

武器を振り上げる敵の間をすり抜けながら斬り進む。

「何い！？」

俺の通り過ぎた直後、手下が血飛沫を上げて倒れ込む光景に啞然とする頭目。

「人を襲う獣に成り下がった者よ。貴様らに生きる明日は無い！」

ザシュッ!!

頭目は一言も発する事無く、その首を地に落した。

指揮官を失った敵は混乱を極め、弱腰となった所を次々と俺達が切り伏せていく。残っていた敵も逃げ去り、戦いが終わった頃その場には俺と女性だけが立っていた。

「どなたかは知らぬが、ご助力感謝する。」

「いや、勝手に乱入しただけだから礼には及ばないよ。それに俺もこの村で食糧を補給しようと思っていたんでね。賊に荒されては困るところだったんだ。」

「成る程。察するに旅の者のようですね。ならば我らと同じという訳か。」

「そちらも？」

「うむ。私は趙雲 字は子龍と言う。自身が腕を振るうに相応しい主を求めて旅をしている。」

趙雲……。好きな武将でも度々名が挙がるあの有名な趙雲がこの女性か。雪蓮で慣れたつもりでいたけど、やっぱり女性なのか。おま

けに美人。こりや他の偉人に会うのも楽しみに成ってくるね。

「俺は姓は煌、名は維だ。字は蒼光。旅の理由は見聞を広める為かな？」

星サイド

「テヤアーーーーー!!」

ブシッ!ドゴッ!

「ぐはっ!」

「がふっ!」

私は襲い掛かる賊を薙ぎ倒し更なる敵と対峙していた。だがそこで視界に弓矢を構える敵の姿が映る。拙い。この体勢で射掛けられては逃れられない。賊の数は予想以上に多く、いつの間にか私も疲労していたのかもしれない。

ザシュッ!

しかしその矢が私に射られる事は無かった。弓兵は突如現れた人影に切り付けられ、弓を抱いたまま倒れ込む。

「だ、誰だ!ぐあっ!」

「くそっ！新手か！？」

賊の動揺に乗じて割り込んだのは一人の青年。端正な顔立ちで、纏う雰囲気は凛々しさと柔和さを兼ね備えていた。凡そ戦場には似つかわしくない涼しげな印象だが、彼はこの場で誰よりも速かった。

敵をかい潜り、私の元へと到達した青年が賊と向き合う。

「助太刀するぞ！」

「ありがたい！」

「はっ！優男が一人増えただけだ！構わねえ！殺っちまえ！」

賊の頭目が怒号交じりに手下を鼓舞する。今の動きを見て彼を唯の優男と判断するとは底が知れる。私一人に苦戦しているながら、増援が来たとなれば旗色の悪さは判るであろうに。

「お主、腕に自信は？」

「この程度の雑魚ならお釣りの方が多い位だよ。」

「ほう、それは頼もしい！」

自信有り気な顔を見て、自然と笑みが零れる。

「先ずは指揮官を倒して、統制を崩す。」

青年は言葉通り頭目の居る一番後方を目指す。だが、到達するまでには数十人の敵が守りを固めていた。

それを滑り込む様に駆け抜け、頭目へと迫ったのだ。

「何い!？」

「ほう…」

頭目が驚くのも無理はない。彼の通り過ぎた直後、手下達は血塗れで地に伏していた。

青年は敵の群れを縫うように進み、同時に斬撃を浴びせていたのだ。流れるような華麗な身のこなしに私は思わず感嘆する。

「人を襲う獣に成り下がった者よ。貴様らに生きる明日は無い!」

口上を述べると共に、驚愕する頭目の首を刎ねた。

あとは統制の乱れた賊など烏合の衆。私達は難なく敵を殲滅する事に成功した。

それにしても面白い御仁だ。即座に敵の指揮官を討ち混乱を誘うとは。分かっているにもそう実行できる事では無い。行く手を阻む敵を一瞬で片付け指揮官に迫る程の武。

「どなたかは知らぬが、ご助力感謝する。」

賊の全滅を確認した私は礼を述べた。先ずは名を訊こう。覚えておいて損は無い筈だ。

護サイド

互いに自己紹介が終わると、村の入り口から二人の女性が駆け寄ってきた。

「ご苦労様でしたー。星ちゃん。」

「すみません。予想よりも数が多かったようです。」

趙雲さんを労う二人。

「いやなに、こちらの煌維殿が助力してくれたのでな。問題無い。」

そう言って俺を紹介してくれる趙雲さん。

「名は煌維、字は蒼光だ。宜しくね。」

「風は程立と言いますー。」

間延びしたしゃべりで、ポヤポヤした娘だ。

「戯志才です。どうぞ宜しく。」

もう一人は眼鏡を掛けたしっかり者という印象を受ける女性。いずれも美人だが個性的な面々だ。

「見ていましたよーお兄さん。素晴らしい剣の冴えですねー。」

「そうですね。遠巻きに見ていたのですが、凄まじい速度で敵を切り伏せていましたね。」

「ははは。そこまで褒められるとむず痒いな。」

普段褒められ慣れていないので、妙に照れてしまう。

「謙遜する必要はありませんぞ。煌維殿の武には確かに誇れるだけのものが有りますからな。」

「ありがとう。ところで、そろそろ村に行った方が良くないかい？」

村では賊が退治できた事で大いに盛り上がっていた。

「ふむ、煌維殿も村での補給が目的のようですし、話の続きは後ほどとしますかな。」

村人達から感謝され補給も済んだ後、趙雲さん達に夕食に誘われた。

「では煌維殿は見聞を広める為とはいえ、特に当てが有る訳は無いのですな？」

「そうだね。適当に諸国を回ってみようとか考えてなかったなあ。」

ラーメンを啜りながら趙雲さんの問いかけに答える。強いて言うなら他の偉人にも会ってみたい所だ。劉備とか関羽とか曹操とかね。

……もう少し三国志も勉強しとくんだったな。

「ならば我々と共に行きませぬか？」

「趙雲さん達と？」

「うむ。我らは陳留へ向かう途中なのだが、なんでもその刺史で曹操なる者が中々の傑物と聞きましてな。私が仕えるに値する人物か、一度見ておこうと思っているのです。」

曹操か。当ての無い俺にとっては願ったり叶ったりだけど…。

「しかしなあ…。」

「うん？何か不満でも？」

「女性の長旅に男の俺が同行するのはどうもね。他の二人も良い顔しんじゃないかい？」

いや、何もしないけどね。

「私は別に構いませんよ？」

「風も良いと思いますよー。むしろお兄さん程の使い手がいれば心強い位ですー。」

「…二人とももっと警戒心持とうな？」

「おや？では煌維殿は隙を見て我らを襲うつもりでしたか？」

ニヤニヤしながらからかう気満々の趙雲さん。この人の性格が分かってきた気がする。

「こ、煌維殿が寝静まった頃に私達を…ブフー…ッ…！」

「おおっ…!？」

「はい、稟ちゃん。トントんしましょうねー。」

今の会話で鼻血まで到達できるとは、戯志才さんの想像（妄想？）力は凄まじいものがあるな。しかし程立ちゃんが彼女を介抱してい

る間にも趙雲さんの話は続く。どうやらこれはいつもの事らしい。

「心配せずともよろしいですぞ。あのような状況で助力を買って出る煌維殿が、狼藉を働くとは思えませんか。」

「信用してくれるのはありがたいけど、それも策かもしれないぞ？警戒が無くなった頃に後ろからズブリ！ってね。」

「ふむ…ですが、そのつもりであれば前もって言いはしないでしょっ？」

「まあ、確かに。」

「ところで、煌維殿のいうズブリ！とはナニの方ですか？」

悪い顔だ。だが俺も弄られる気は無いぞ？

「ナニとはナニでしょう？」

「ですから、ナニとはナニの事なのかはつきりとお聞かせ頂きたい。」

「はて？ナニにナニ以外のナニがありますかねえ？」

俺と趙雲さんの話が禅問答の様相を呈した頃、程立ちゃんが口を挟んだ。

「あのーそろそろ猥談を止めて貰わないと、稟ちゃんが限界なのですがー。」

横を見ると、更に多量に鼻血を垂れ流す戯志才さん。ちょっとした殺人現場のようだ。

「煌維殿のナニがナニでナニ……。」

ブツブツと呟いていた。だが俺と趙雲さんはニヤリと顔を見合わせ、程立ちゃんに問いただした。

「「どの辺りが猥談だった？」」

「ぐう……」

「「寝るなっ！！」」

第五話（後書き）

これから原作キャラとの接触が増えそうですね。

第六話（前書き）

サブタイ入れると必ず第六羽^ろつてなる。ウザス。

第六話

結局俺が男だからどうこうという話は有耶無耶なまま、趙雲さん達三人に同行して陳留を目指す事になった。

「さて、今日はこの辺りで野営の準備をしようか。」

「んむ？だがまだ陽は高いですぞ？もう少し先へ進めるのでは？」

確かにまだ陽は高いが、暗くなってから動いては危険だ。それにペーイスが速かったせいかわ武者でない二人は少々バテ気味だ。一番体力の無い程立ちゃんは俺の腰布に？まって歩いてたりする。

「暗くなってから準備すると危険だからね。夜行性の獣も居るだろうし。賊も警戒しないと。それに趙雲さんとはともかく、戯志才さんと程立ちゃんが明日に疲れを残さないように早めに休息を取ろう。」

俺は背中にもたれ掛かる程立ちゃんを大きめの石に座らせる。

「ぐう…。」

「戯志才さんは大丈夫？」

「ハア…ハア…え、ええ…。問題ありません。」

それにしても眼鏡が曇っている。俺は水筒を取り出すと、息の乱れがちな戯志才さんに手渡す。

「まあ、これでも飲んで一息ついて。」

「はい…スミマセン…。ごく、ごく…」

「急ぐ旅でも無いし、今回は健康第一で良いんじゃないかな。」

「くす…煌維殿は優しいのですな。」

そう言って、納得したのか近くの岩に腰を下ろす趙雲さん。

「俺は焚き火に使えるそうな木でも集めてくるから。趙雲さん、辺りの警戒を頼むよ。」

「うむ。心得た。」

ついでに何か獲物でも狩るか。村での補給で幾分余裕があるものの節約出来るに越した事は無いからな。今日は二人に精の付くものを獲ってきてやろう。狩猟も武術と共に母さんに叩き込まれているのさ。

最近野生化してるなあ俺。だが、望むところだ（キリッ）！

星・稟・風サイド

「それにしても煌維殿はさすがですね。疲れ知らずというか、底無

しの体力で。更に私達の事まで気遣って下さるとは。」

水筒の水を飲み、やっと人心地ついた稟は護の行動に感心していた。

「うむ。そうだな。とても野に居るべき御仁ではない。」

「そうですねー。星ちゃんがお兄さんを旅に誘ったのは正解だと思いますよー。」

稟の言葉に頷く二人。事実、護が加わってからの旅は今までよりも快適だった。特に食事においてはぐつと質が高まり、蛋白源の魚や獣だけでなく、旅で不足しがちな野菜や果物までも採ってきてくれる。

実はその知識は前世でのものだ。病床にいた護はいつか「ハイキングを！」と夢見て教本を読み漁っていた。それを3人が知る由も無いが。

「腕も立つ上にあの気遣い。中々の有望株だとは思わぬか稟？」

「確かに。近い将来、どこか有力な諸侯に取り立てられるのは間違いないでしょうね。」

だが、星は生真面目な稟の意見に首を振る。

「ククク…そうでは無い。男としてどう思うかと訊いているのだ。」

「お、男として?。」

「ふふつ、平たく言うならば伴侶にするとしたら煌維殿のような殿

方はどうか…とな。」

「は、伴侶!？」

既に稟の鼻腔は決壊寸前だ。

「煌維殿は懐も大きく、顔も端正だ。きっと良い結婚生活が送れような。」

「けけけっ結婚!？星殿！飛躍し過ぎです!」

「何が飛躍なものか。ああいう良い男というのは直ぐに売り切れてしまうものだ。早めに唾を付けておくに限るぞ……っておや？」

「はい、稟ちゃん。トントんしましょうね!。」

「ふがふが…うっ…。」

星の話が終わりきる以前に、稟の鼻腔は臨界点を突破していた。

「時に稟？お主の水筒、煌維殿の飲みかけでは無かったか？」

「ブフーーーーー!」

護サイド

野うさぎが二匹に山菜がこれだけあれば十分か。おっ？こんな所に行者にんにくが。精力つけるにはもってこいだ。ワラビは…アクが強いからやめとこう。

「そろそろ行くか。」

陽は高いけど待たせ過ぎるのもなんだ。俺は来た道をＵターンして皆の元へと戻った。

「ただいまー。」

仲間の場所に帰ると、既に野営の準備を始めていて俺は収穫を皆に披露した。

「おっ？中々大獵ですな。」

「疲れを取るには睡眠と食事が大切だからね。ついでに行者にんにくも見つけたからこれで精をつけてくれ。」

「おやあ？煌維殿は私達に精をつけさせてどうするおつもりかな？」

「もちろん陳留まで頑張らないと。」

「…なんだつまらん。」

「………？」

「うーん。良く寝た。」

翌朝になり、俺は寢床から起き上がると周りを見渡す。

「スースー…。」

焚き火の方を見ると、最後に見張り役だったらしい趙雲さんが槍を持ったまま眠りこけていた。意外に疲れてたのか？そういうの隠すタイプっぽいし。

邪気の無い純真な寝顔だ。

「わ、可愛い…ってそうじゃねえか。」

俺は起きないようそつと彼女の肩に上着を掛けてから川辺へと向かう。

バシャバシャ！

「くー！この冷たさが堪らん！」

川の水で顔を洗い、水筒に水を補充した後は日課のトレーニングだ。準備運動を兼ねたラジオ体操をしてから実戦向けの鍛錬を始める。

「ふっ！」

シュバツ！

左右交互に突きを放つ。

「はっ！」

ズババ！！

今度は右足による二段蹴り。続けてそれらを繋ぎ合わせて一連の動きで行う。

「うん。まあまあ…だな。」

何度か体術での動きを確認し、仮想の敵を相手にする。もちろん相手は母さん。というか賊以外で他の武人と相對した事無いよな。今後の課題にしよう。

俺は槍を構えて般若の顔をした母上をイメージ…やっぱやめよ。怖すぎる。顔は普通でいいや。まったく勝てる気がしねえし。

星・稟・風サイド

「星ちゃん星ちゃん。朝ですよー。」

「ん、んん…？」

風に身体を揺すられ、いつの間にか眠っていた星が目を覚ます。

「おおっ！すまぬ。私とした事が居眠りとは。」

「それはいいですからーアレを見てくださいー。」

「ん？あれは…」

風の示す方向は川原。そこでは鍛錬で仮想の敵と汗を流す護の姿だった。

「はあ…煌維殿は無手での戦闘もこなすんですね。」

「速すぎて風には時々攻撃が見えないのですよー。」

「…。」

三人は護の洗練された体術と身のこなしに暫く見惚れていた。

「フ、フフフ…。」

「あれー？星ちゃん、どうしましたー？」

「もう我慢出来ん。やはり煌維殿には一手仕合つて貰わねば。」

武者としての心を刺激された星は、槍を携えて立ち上がった。

「あらら、お兄さんの武が星ちゃんに火を付けちゃったみたいですねー。」

「武人で無い私達には良く判らない感覚です。」

護サイド

イメトレを始めて三十分程が経った。更に母さんの斬撃が俺の額を襲う。上方から振り下ろされた槍をかわす。だがこれはフェイント。流れたはずの槍はそのまま更に鋭くなって突き上げてくる。

上体を反らしてそれを避ければ伸びきった身体に隙が出来る。俺は腹部へと会心の一撃を…

「ヤアアアッ！」

つて、えええっ！？

バシッ！

想定外の方から飛んできた突きを俺は寸での所で受け止める。

「ほう、まさか手で掴むとは思いませんでしたぞ？」

「趙雲さんか。」

俺の掴んだ刀身の先で趙雲さんが不敵に笑っていた。

「煌維殿とは最初に会った時から一度仕合たいと思っていたところ。

良い機会です。ここで一手お相手願えますかな？」

そういう事か。

「構わないよ。俺も少し経験不足を心配していたとこだ。」

「私の一撃を受け止めておきながら経験不足とは恐れ入る。」

趙雲さんの顔が眠っていた時とは違う、引き締まった武人のものとなる。

「てえええい！」

刀身を離すと同時に戦いは開始され、素早い突きを乱れ打つ趙雲さん。

母さん程では無いが中々の鋭さだ。

「はあああああっ！！」

けれど体捌きやリズムが異なり、母さんとの仕合いに慣れすぎた俺には良い刺激になる。

ビュオッ！

風切り音のする攻撃を避ける。

「こつちも行くぞっ！」

「来い！」

趙雲さんの目前へと駆け出す。それに合わせて来た突きを避けながら、直前で沈み込みアッパー気味の正拳を繰り出す！

「むっ！？」

かわされた直後に軌道を変化させて肘打ち。

ガシッ！

それを槍の柄で防がれる。

「縦横無尽の変化ですな。」

「素手ほど多様性に富んだ戦法は無いからね。」

「成る程っ！」

振り払うように薙ぎに来た槍を避けて飛び下がる。再び間合いが開き、お互いに出方を窺う形となった。

次はこれで行くか。

俺は構えを解くと両手を下げ、足を肩幅程に開く。

「む？もう降参ですか？」

「いや、違う。これは自然体と言って、全ての構えの中間に位置する構えさ。言うなれば構えない事が構え……ってね。」

前世で呼んだ格闘技通信の受け売りだけど。

母さんに鍛えられてようやくこの意味が理解できた。

「…面白い！ならばこの趙子龍の槍、その構えで受けて頂こう！はあああああつ！！」

趙雲さんの渾身の突きが胸元に届く瞬間、身体を横にスライドさせて手元を蹴り上げる。

「くっ！？」

槍から離れた手を掴んで極め、組み伏せる。

ドサッ！

「俺の勝ちだね。」

「うむ…参った。どうやら私の負けらしい。」

極めた手を解放すると、趙雲さんを助け起こす。

「怪我は無い？」

「大丈夫です。しかし奇妙な技ですな。関節を極められて痛みを避けようとしたら自分から飛んでしまった。」

腕がらみなんて技まだこの世界には無いよなあ。

「そつだ。煌維殿、これを。」

趙雲さんが手に持っているのは、彼女に掛けてあげた上着だ。俺はそれを受け取ると羽織り直す。

「ふふつ。煌維殿の気遣いに感謝しますぞ。」

「風邪は引かなかった？」

「ええ。お蔭様で。それと煌維殿、私の真名を受け取って貰えないでしょうか？」

「真名を？」

「煌維殿は共に旅をする仲間だけでなく、私を負かすほどの武人です。ぜひ受け取って欲しい。」

「分かった。代わりに俺の事も護と呼んでくれるかい？」

「護…それが煌維殿の真名ですな。では私はこれから星と呼んで下され。」

雪蓮に続いて星までかあ。英傑の真名を二つも貰っちゃったよ。

「星ちゃんだけ抜け駆けはズルイですよー。」

「うおっ！？」

いつの間にかひょこつと現れたのは程立ちゃん。

「お兄さん、風の事も風と呼んで貰いたいのですー。」

「いいの？」

「はいー。お兄さんの戦いはとても美しかったのでー。」

「おい風、それは私の戦い方が汚いとも言つのか？」

「ぐっ…」

「寝るな！」

「おおっ？それと稟ちゃんも何か言いたい事が有るそうですよー。」

風ちゃんの隣でモジモジしている戯志才さんが居た。

「あの…すみません煌維殿。実は私の名は偽名でして。旅をする上での用心のためとはいえ、騙す形になってしまい申し訳ありません。」

丁寧に頭をさげる戯志才さん。生真面目な人だねえ。

「いやー別に気にしてないから。そんなに畏まらなくても良いよ。」

「ありがとうございます…。では改めて名乗らせて頂きます。郭嘉と申します。真名は稟です。」

「真名まで貰って良かったの？」

「はい。旅をする仲間ですから。」

「本当はお兄さんの戦いに見惚れていたのです！。」

「ふ、風！余計な事をっ！」

第六話（後書き）

戦闘シーンがムツカスィー！

星さんの寝顔想像した人、手を上げるー！

お気に入り登録100件記念 番外編 (前書き)

ネタ?に走ってみた。

お気に入り登録100件記念 番外編

「ごそごそ…ごそ…ごそごそ…」

「うっーん。」

ムニユリ…

…何だろう？寝返りを打った先で、妙に柔らかくて気持ち良いモノが俺の顔を包み込む。

「ん…んん…。」

そして耳元でくぐもった呻き声と背中にも同じ感触が当たっている。

……。

それにしてもいい匂いだ。甘酸っぱいような…それでいて芳しい香り。

もう少しこれを感じていたい俺は柔らかい場所に顔を埋める…。

「ア…ん…。」

すると、頭上から小さい喘ぎ声が聞こえる…。

ん？

喘ぎ声？

「はっ!？」

目を開けて上を見上げるとそこには…

「な、何で祭さんが!？」

「おや?起きたようじゃな護。」

俺と目の合った祭さんが柔らかに微笑む。

「ふふ…護は余程わしの胸が気に入ったようじゃな?」

ええええっ!?

ど、どういう事だ!?!何故布団の中に祭さんがっ!?

がさっ!ギョーン!!

「うわっ!」

ぼふっ!

今度は逆方向に引っ張られる。

「もう!祭ばかりズルイ!」

「しえ、雪蓮!？」

背中に当たっていたのは雪蓮の胸!?

「護？護は私の胸の中が一番好きなのよねー？」

ギュッ！

雪蓮が俺の頭を胸に抱きかかえる。

おお…こ、こっちも柔らかい…。

「ふむ、ならば護に比べて貰おうではないですか。」

むにゅう…

後頭部に祭さんの特大メロンがぁ…！前後を大人の女性の胸に挟まれ、俺の脳内は大混乱だ！

「ねえ、護…また…しちゃう？」

「すすす、するって何を！？」

「そんなの…決まってるでしょう？」

決まってるんですかぁ！？

「昨日の護…凄かったわぁ…。」

何かを反芻してウツトリと呟く雪蓮。一体何をしたんだ昨日の俺！！

「まったく…今更、何を遠慮しておるのだ護？」

「ふう…夢だったのか。」

惜しかったような、驚いたような…しかしリアルな夢だったぜ。寝汗びっしょりだ。まさかあの二人を娶るなんて、母さんの戯言と同じじゃないか。

俺は手ぬぐいを探して辺りを見回す。

「これですか？」

「あ、どうも…って星？」

手ぬぐいを差し出したのはいつの間にか隣に立っている星だった。

「余程恐ろしい夢でも見られたようですね？」

「いやあ…怖いというか何と言うべきか…。」

「ふむ…ならば今夜は私が添い寝してしんぜよう。」

「ははは…星らしい冗談だ。…冗談…だよね？」

「いいえ。冗談ではありませんぞ。」

至極当たり前のような真顔の星。

「いやいやいや！嫁入り前の女性がそんな事を言ってちゃ駄目だつて！」

「嫁入り前とは何の事ですか？　つい先日、夫婦になつたばかりではありませぬか。」

「め——お——と——!？」

「あ、ですが……腹の子に障りますからな。激しくするのはご勘弁下されよ？」

「腹の子っ！？だだだだ、誰の？！」

「もちろん……私と貴方の子ですぞ。」

うえええええええええええええええええええええええ
えええええー！！？

と、
いう夢を見たんだ。

それは外史の記憶の断片か……それとも……。

続く

な訳ないか。

お気に入り登録100件記念 番外編 (後書き)

R - 15の壁に挑戦。

ニヤニヤしながら読んで貰えれば成功かなと。

第七話（前書き）

だ、誰か私に文才を…ガクッ…。

第七話

「風ちゃん、陳留まではまだ掛かるのかな？」

「そうですねー。あと三日も北へ上れば入るはずですがー。」

「あそこに村が見えますね。そろそろ食糧の補給をしてはどうでしょう？」

稟さんが示す方角に村があった。俺の住んでいた故郷とそう変わらない規模だ。

「ふむ、宿などあれば良いのだが。」

俺も星の言葉に頷く。長旅でそろそろベッドが恋しくなった頃だ。

「お待ち下さい！」

村へ近付くと、入り口に立っていた女の子が俺達一行を呼び止めた。

「何か用かい？」

「すみません。どうやら旅の方々の方なのですが、この村は早々に離れられた方が宜しいかと思えます。」

どういう事だろう？

村によっては他者の立ち入りを制限する所もあるのは知っているが、少し物々しい感じだ。

「村の雰囲気もチトおかしいですな。」

星も同じものを感じたのか、眉をひそめている。

「この村に向かって賊が進行しているらしく、警戒を強めているところなのです。」

「賊か…。」

本当に乱世だな。朝廷は何をやっているんだか。…腐ってるんだっけ？

「ですから出来るだけ早くここを離れられたほうが宜しいと思います。」

この娘も戦うのだろうか？良く見ると手甲を嵌めていて、軽装だが鎧らしき物も身に着けている。

けれどそれよりも…

「君、少し頬が切れているよ。」

「は？あ…すみません。今朝の鍛錬で切ったようです。」

ぞんざいに傷を拭う。

「駄目だろ。ちゃんと手当てしないと。」

俺は懷から自家製の傷薬を取り出す。山で採った薬草で作った母さん直伝のスペシャルブレンドだ。

「え？あ、あの…」

「じつとして。」

「はあ…？」

戸惑う少女を諫め、頬に薬を塗る。

「これで良し。小さな傷でもそこから良くない菌…じゃ分からないか。汚れで悪化したり病気になる事もあるからね。」

「あ、ありがとうございます…」

何故か顔を赤くする少女。

「クツクツク…本当に護殿は女殺しですな。」

星が小さく笑っている。何の事だ？

「それより早く逃げて下さい。このままでは賊と鉢合わせしてしまいます。奥様方にも被害が及ぶかもしれません。」

「奥様？」

「ほほう。奥様とは私達の事らしいですぞ？」

「ま、護殿の妻…私達が！？ブフー…！！」

「はい、トントンしましょうね!。」

後ろで何かやってるけどスルーの方向で。

「俺達は旅の仲間だよ。それに賊なら俺達も何度か退治した経験が有る。力に成れるかもしれない。」

「本当ですか!？」

「うむ。見たところ、ここの村人はあまり戦慣れして居らぬ様だ。私達で良ければ力を貸そう。」

「ありがとうございます!ではこちらに!」

俺達4人は少女に案内され村の中へと入った。

「敵の数は?」

「報告では三千程です。」

「こちらの兵数は?」

「義勇兵と村の志願兵を合わせて約一千です。」

「この村の門は幾つ？」

「大きい正門は北と南にあります。他は閉め切りました。」

「賊の到達時刻は？」

「昼過ぎになると思われます。」

俺の質問にハキハキと答える楽進。先ほど村の入り口で出会った少女の名前だ。

「援軍は来ぬのか？」

「陳留の曹操様に使いを出しましたが、正直、間に合うか…微妙な所です。」

星の問い掛けに楽進は苦々しい表情で答える。

「風ちゃん、稟さん、どう思う？」

頭脳労働組に考えを求める。

「そうですねー。ここは援軍が来るまで籠城して耐えるべきかとー。」

「私も風と同意見です。正門にも柵を作って立て籠もるのが得策でしょう。」

俺も二人と同じ考えだ。

「風！追加報告や！賊は南西に集結しているそうやで！」

村長の屋敷に作られた簡易的な作戦本部に元気な関西弁が響く。

何故に関西弁？

『外史だからさっ（キリッ）』

何か幻聴が聞こえた。深くは考えるまい。

「…ってこちらさんは？」

「真桜、こちらは煌維殿だ。それと奥様：ではなく、お仲間の趙雲殿に戯志才殿、程立殿だ。賊退治の経験が豊富で手伝って貰うことになった。煌維殿、彼女は私達の仲間の李典です。」

どうでもいいが星、奥様と言いかけた時にニヤニヤしないでくれ。

「よろしくな。」

「よろしゅうな兄さん！ほんま心強いで！」

楽進とは違ったフレンドリーな性格らしい。さすが関西人…いや中国？

思考がドツボにハマリそうなので止めとこ。

「では先ずは急いで柵を作ろう。李典、籠城のための柵を作るから材料を集めてくれ！」

「任せとき！」

「風ちゃんと稟さんは村人に指示を！」

「はいー。なのですー。」

「分かりました。」

「私はどうしましょうか護殿？」

「星は集まっている志願兵の指導を頼む。」

「心得た！」

さあて、本番までに間に合わせないとな。

「兄さん、そっち支えてくれる？」

「こつ？」

「もう…チヨイ上。」

俺は李典と集めさせた資材で柵作りを手伝っている。彼女は物作りの才能があるそうで、テキパキと柵を建造していく。これなら賊が

来るまでに間に合いそうだ。

「兄さん力持ちやなあ。こんなん普通は五・六人で抱えるもんやで？」

「そういう李典だつてかなり器用じゃないか。」

「にははは！そう言われると照れるで。」

満更でもない笑顔を浮かべながら工具を扱う李典。

「ウチの本職はからくりの発明やからな。こういう仕事は得意なんや。」

「へえ…発明か。どんな物作ってるんだ？」

「色々あるでえ。自動籠編み機に、からくり人形…最近釣竿も作つたなあ。」

「釣竿？」

「そうや。ウチの作った釣竿は画期的やで。巻いてある糸が竿から飛び出すんや！これがあれば遠い所にも糸が届くで！」

それってリールじゃね？

「良いなソレ。戦が終わつたら見せてくれよ。」

「おお？興味あるんかいな。ええで。けど扱いが難しゅうて、凧は糸でグルグル巻きになつたんよ。」

確かに慣れないと難しいって聞くよな。でも、キャンプと釣りって昔は懂れたなあ。病床で読んだ『猿でも分かるキャンプファイヤー!』って本で、いつかはフィッシング!ってね。

「良し…ここはええな。ええと…次は。」

柵に上った李典が身を擦る。

「一度降りた方が良くないか？」

「大丈夫、大丈夫…って! わわわっ! !」

ガシヤッ!

足場の木材がズレ動き、体勢を崩す。

「李典! ?」

ドサッ!

間一髪、落ちてくる李典を受け止める事に成功する。

「ほらな? 気を付けろよ?」

「う、うん……すんまへん……。」

「真桜ちゃん! 資材追加なのー!」

「へ?」

李典の知り合いらしき同じ年頃の少女が資材を持って現れた。

「キャ…」

「キャ？」

「キャアー…!!真桜ちゃん^{まなこ}が男の人と抱き合ってるのー!!
これは早速風ちゃんに報告なのー!」

「う、誤解や沙和あー…!!」

「で…護殿は私達が必死に準備を整えている頃に、胸の大きい女子^{おなご}と乳繰り合っていたと?」

誤解です。

勘弁して下さい。

許して下さい。

歌えば良いんですか?俺の歌を聴けえー。誇りをー 笑い飛ばされ
てえ

「クツクツクツ…冗談ですよ。そんな度胸が護殿に有れば、とつくに我らは手籠めにされておりますからな。」

誤解は解けたものの、星にとっては格好の餌食だったので現在弄られ中だ。

「ゴホン！それより準備は整った。これからについて話し合おう。」

「チツ…」

そこ、舌打ちしない。

「門の封鎖と柵の取り付けは終わりましたが、出来れば何かもう一手欲しいところですね。」

稟さんの提案はもつともだ。こちらの用意は万全になったので、賊に対して何か仕掛けたいものだ。

「稟さん、こういうのはどうだろうか？」

俺の策を提案してみる。

「なっ！？煌維殿、それは自殺行為では！？」

隣で聞いていた楽進が異議を唱える。

「しくじると死ぬで！それ！」

李典もか。

「いや…護殿ならば可能であろう。」

逆に賛同してくれたのは、俺を散々弄って楽しんでいた星だ。

「成功すれば敵が混乱するのは間違い無いのですがね。」

「士気の低下が見込める上に、時間も稼げますので援軍も間に合うかもしれません。」

二人の言う通り効果は抜群だろう。

「し、しかし…。」

「まあまあ…楽進。」

星が懐疑的な楽進を宥める。

「護殿：成功させる自信は有るのですな？」

俺を見つめる星。その眼差しは真剣だ。

「もちろんだ。」

「生きて戻るつもりも？」

「有る。」

「ふっ…ならば行かれよ。」

「うん。ありがとうな星。」

信じてくれる仲間ってのは良いもんだねえ。

第七話（後書き）

真桜は俺の嫁。異論は認めない（キリッ）

第八話（前書き）

サブタイ付けた方がよい？

第八話

村を出た俺は、賊の集結している丘の近くへとやってきた。

「おー！居る居る。むさ苦しいのがムジャウジャと。」

物陰に隠れて様子を窺う。

「どれが頭目だ？正規の軍と違って分かり難いからな。」

まだ進軍を開始していない。こちらが気付いてるのも分かって無いのか？鈍重も良いトコだ。

「仕方ない。本当はやりたく無いんだけど…。」

砂を顔に塗り服を汚す。髪もかき乱してみすばらしさを演出。

「これで完璧だ。」

俺は変装を終えると、鼻唄混じりに賊軍へと溶け込んだ。

「本当に大丈夫なんでしょうか？」

「兄さん死んでしまふんとちゃう？」

「さすがに沙和も無茶だと思うのー。」

志願兵の指導をしている私の側で、村の三人娘達は、未だに護殿を心配している。

「三人とも心配は要らんと云つておるだろう。護殿の実力ならば、例えバレたとしても敵を掻い潜つて帰つてくる筈だ。」

「そんな言つたかで、三千対一やで？」

「ふっ…ならば護殿が三千人全て斬つて帰ってくるやも知れんぞ？」

「ありえへんよー。」

「そ、それは難しいと思うのですが。」

誇張なのは分かっているが、やけに拘るなこの二人。

「もしやお主ら、護殿に惚れたのか？」

「ち、違いますっ！」

「んな訳あるかい！」

ククク…分かり易い反応だ。向きになる辺りがますます怪しい。私

は新しい玩具を得たような感覚を覚え、不安を取り除いてやるついでにからかう事にした。

「護殿は男前だからな。お主達が惚れるのも分からんでも無いぞ？」

「ですから！私は別にそういう意味で心配している訳では！」

「ほう、楽進は違うのか。ならば李典、お主はどうだ？偶然とはいえ、護殿の胸に抱かれたそうではないか。」

「あ、あれは唯の事故やで姉さん！」

「そうか？だが後学の為に聞いておこう。どうであつた護殿の胸の中は？」

「へ？そりゃ、遅いし、顔が近いからええ男やなあって……って何を言わせるねん！」

「ははははっ！」

面白い。これだからからかうのは止められん。何気に楽進も聞き耳を立てておるし、二人とも少なからず護殿に好感を抱いておるのは間違い無いようだ。

「そついう趙雲殿はどうなのです？」

「そや！一緒に旅しとる仲間なんやし、何かイロイロと有ったんとちゃうん？」

「うん？私か？」

二人が私を窺うように見つめる。成る程。一矢報いようという魂胆か。

「そうだな…若い男女の長旅だ。それなりの事は有ったかも…知れぬな。」

興味津々な二人に遠い目をしながら嘯く。

「お、大人や…」

「二人の間に一体何が…」

特別な事は無かったのだがな。まあ、向こうが勝手に想像するのは自由だ。

しかし何も無いというのも女としては癪だな。護殿が紳士的なのは共に旅をして分かったが、私ももう少し積極的に動くべきか…。

「姉さんが無言や。」

「やはり煌維殿と趙雲殿は男女の…」

おっと、思案に耽ったせいで二人の推測に拍車を掛けてしまったか。

「ともかく、二人も意中の男が居るならば積極的になる事だな。こんな荒れた世だ。悔いの残らぬようにするべきだろう。」

「な、成る程…」

「尊敬するで姉さん。」

ふっ、尊敬の眼差しが痛いほどだ。

「オイ！どうした姉ちゃん！？」

後方で村人が声を上げる。

「む？何が有った！？敵か！？」

私は武器を取り、現場に向かう。

「趙雲さん、この姉ちゃんが鼻から血を流してぶっ倒れてたんださあ。」

「せ、星殿と護殿に…な、何が…」

「聞いておったのか稟。」

護サイド

「潜入成功〜。」

ごく自然に賊軍に入り込めた俺は、頭目を探して人波の中を進んでいた。

「中々見当たらないな。」

偉そうにしてるのが頭目だろうから分かり易いと思ったんだがなあ。

「おい。おめえ……」

ドキッ！

「おめえ、見かけない顔だなあ。」

「へえ… オラはついこないだ入った新入りでさあ。あいさつしたいんだが、お頭の顔がわっかんなくてよう。何処おるだか教えてくんねかあ？」

「しっかたねえなあ。頭は向こうの天幕の中だあ。」

ラッキー。しかも天幕の中とは好都合だ。

「そうかあ。あんがとなあ。」

「おい。」

ドキドキッ！

「これから襲う村はベッピンな女は居るだかなあ？」

「さ、さあ…どうだべかなあ？」

「最近溜まってっからなあ。捕まえたら俺の下でヒィヒィ言わせてみてえなあ。」

「そ、そうだなあ。」

ケツ！テメエは槍で突かれてヒィヒィ言ってる！

「フヒヒヒヒ……」

「そんだったら。おらは、行ってくるでよう。」

「おう、せいぜい気に入られてくんだなあ。」

下卑た男の笑いに辟易しながら天幕へと向かう。

天幕の中では男達が酒を飲み交わしながら談笑していた。暢気なもんだ。

「んん？なんだお前は？」

現れた俺に髭面の中年が目を向ける。こいつが頭目だろう。

「報告に来ました！」

五人か…行けるな。

「報告？」

「はい。どうやら侵入者が居るようです！」

「侵入者だあ！？何処に？」

「ここだよ！！！」

ザシュ！

「ぐ…かはっ！？」

蒼天竜牙を抜き放ち、頭目の喉を掻き切る。

仰天する子分も間を置かず斬り捨て、天幕に居るのは俺一人になる。

「……。」

外の様子を窺う。大丈夫だ。気付かれていない。

そのまま何食わぬ顔で天幕を出ると、第三者を装い騒ぎ立てる。

「たーいーへーんだー！！お頭が死んでるぞー（棒読み）！！！」

「何い！？」

「どうしたどうした！」

「頭が死んだってえ！？」

あっという間に人が押し寄せ、混乱している隙にその場を離れた。

首尾は上々だ。作戦の成功に気を良くした俺は意気揚々と村へ戻る。

「ただいまー。」

ヒョイツ！

柵を飛び越えて中に入る。

「あーー！！！」

「ん？」

「秋蘭様ー！敵です！賊でーす！」

「はあ！？」

ピンク髪の子が俺の顔を見るなり騒ぎ始める。

「何！本当か季衣！？」

声を聞き付けて現れたのは、弓を携えた水色の髪の女性。

「本当です！柵を乗り越えてくるのを見ましたあ！」

「おのれ！敵の斥候か！？」

「えええええっ！？」

ヒュン！

「おおっ！？」

俺を狙った矢が女性の手から放たれる。

「ちよつと違う違う！」

「何処が違うと言うのだ！その薄汚れた格好に乱れた髪！賊そのものではないか！！」

変装戻すの忘れてたああああー！！

「誰か誤解を解いてくれー！」

帰ってきた方が危険ってどういう事？

数分後、偶々通りがかった星に誤解を解いて貰った。

「本当に済まなかった。煌維。」

「ゴメンね兄ちゃん。」

射的的状态だった俺に謝る夏侯淵さんと許緒ちゃん。話によると彼女達は曹操の遣わした援軍。その先遣隊だそうだ。

「いや、元はといえば俺が格好を戻し忘れたのが悪いんだ。気にしないで。」

今日はよく誤解される日だ。

「そう言ってくれると助かる。」

夏侯淵さんがほっと胸を撫で下ろす。

「ところで護殿、策は上手く行きましたかな？」

「おう！ばっちり！」

星の問いに満面の笑みで答える。

「今頃向こうは大混乱だろうから、立て直すにしても十分な時間が稼げたと思うぞ。」

「煌維、策とは一体何の事だ？」

「さっき俺は村の外から来ただろう？賊軍に潜り込んで頭目を斬ってきたんだ。」

「……は？」

「え？」

夏候淵さんと許緒ちゃんが話を聞いて目を丸くする。

「ははは。幸運だったなあ。天幕の中で偉そうにふんぞり返ってたから、手下のフリして簡単に殺れたよ。お蔭で誰にもバレずに帰ってこれたし。」

「ほ、本当なのか？」

あれ？信じて貰えない？

「ククク…夏候淵殿、信じられぬのも分かるが護殿はそういう人なのだ。彼がやったというのなら間違い無い。私が保証しよう。」

星がお墨付きをくれた。

「そ、そうか…。では、これから賊を迎え撃つ方法を話し合おうとしよう。」

作戦会議の結果、夏候淵さんの連れてきた弓隊で敵を牽制。他は四方に分かれて守りを固める事になった。こちらの数は夏候淵さんの兵を合わせて二千。最初よりは分が良い。しかも敵は大将を失って

いるので、碌な指揮が取れないだろう。曹操の本隊が来れば確実に勝てる。

俺は南方を任され、楽進と共に敵を待っている。

「南西より敵の軍勢発見！」

「お？やつとお出でなすったか。」

柵の上から眺める俺の目に、賊軍の姿が映った。予想よりも遅い。やっぱり立て直しに時間を食ったみたいだ。

「いよいよ…ですね。」

緊張気味の楽進が息を飲む。

「そう緊張しなくても大丈夫だって。」

「煌維殿は、あの中に入って賊の頭目を討ったんですよ？周りは全て敵で、恐ろしくは無かったのですか？」

「ああ。もう慣れた。」

「慣れるんですか！？」

うちの母さんを舐めちゃあかんぜ楽進。

「俺に武術を教えたのは母親なんだけど、あの人無茶苦茶なんだぜ？子供の頃、度胸付けに賊に紛れ込ませたり、俺を囷にして敵を誘導したりな。あと、小刀一本で山に放り込まれた事もあったな。」

「そ、それは何というか…壮絶な母上ですね。」

分かってくれるか。楽進、君は良い奴だ。

「話は変わるが、楽進？」

「何でしょう？」

「恋人は居る？」

「んなっ！？」

俺の質問に顔を真っ赤にして狼狽する。面白いなあ。最近は星にか
らかわれてばかりだったから余計にね。

「わ、私は見ての通り無骨物なので、恋人なんてものには縁はあり
ません！」

「そうか？十分魅力は有ると思うけどな。」

「そんな…魅力なんて有りません。私は戦い方が下手なので肌に傷
も多いですし。真桜や沙和のように女らしくもありませんから。」

楽進にとって身体の傷はコンプレックスになっているらしい。それ
を気にしている辺り、十分女の子だ。

俺の母さんなんて男より男前だぞ？それでも父さんと結婚してる。
楽進の理論で行くと俺は生まれてきて無いな。

「傷なんて戦いや鍛錬の結果だろう？ 誇りこそすれ恥ずかしがる必要は無いよ。」

「ですが…」

「貰い手が無かったら俺が貰ってやろうか？」

「ななな何を言ってるのですかぁ!？」

恥ずかしさを誤魔化す為に声を荒げる。

「そうそう。その意気だ。戦も恋愛も萎縮していたら良い結果は出ないぞ？」

「ハッ!？ もしや煌維殿は私の緊張を和らげる為に？」

「さあ、どうかな？」

俺は楽進に片目を瞑ってみせる。

「さあ! 後のおしゃべりはここを生き抜いてからにしようか楽進!」

「はい!」

星・真桜サイド

「ハッ!？ 何やら面白そうな催しを見逃した気がする!」

「姉さん、戦いに集中してえなあ。」

第八話（後書き）

緊張感が無い！

シリアスは向かねえんだYO！

第九話（前書き）

戦のシーンは勝手が分からず苦労します。

第九話

敵が村の前に陣取った。今は両軍が睨み合った状態だが、号令があれば一斉に敵が押し寄せるだろう。兵達にも緊張が走る。

「…そうだな…最初が肝心だし、いっちょ脅かしてやるか。」

敵の出鼻を挫く方法を考え付いた俺は尻に指示を出す。

「楽進、先制攻撃で奴らの出鼻を挫く。味方が巻き込まれないように兵を待機させておいてくれ。」

「単身で突っ込むおつもりですか！？無茶です！」

「大丈夫だ。言っただろう？この後、また二人でおしゃべりするんだって。死ぬつもりは無いよ。」

「…分かりました。御武運を。」

楽進の返答を聞くと、俺は柵を乗り越えて敵と正面から相對する。

「我が名は煌 蒼光！！人を辞めた外道ども！村を襲いたくばこの俺を倒して行け！！」

「何だコイツ！」

「一人で来やがった！馬鹿か！？」

「構わねえ！殺っちまえー！！」

俺の名乗りが敵を刺激したのか、号令も無しに戦闘を開始する賊ども。本当に指揮系統は機能していないらしい。ここへ来たのも当初の目的を達成しようとする情性で来ただけだろう。

俺が副官なら中止させるが、奴らにはそういう存在は居ないらしい。居ても無能か押さえる器量の無い奴だ。こんな所にも先に頭目を倒した効果が表れている。

「これで良いか。」

俺は近くに生えている大木に歩み寄ると、その幹に両腕を回す。

「ウオオオオオオオオオ！リヤアアアアアアアアアアアアアアアア！
！！！！！！」

ドゴオオオオオオツ！！

「「「な、何iiiiiiiiiiiiiiii！？」」」

大木を引き抜き敵兵に構える！

「バッター四番！煌 蒼光！！受けてみる！必殺、首位打者剣ツ！
！」

ドガアアアアアッ！！

大木をバット代わりに、賊を殴り飛ばす。

バキィ！ドガア！ボゴツ！！

「オラオラア！！俺に選球眼は無いからな！見逃しも空振りも無しだ！来た球（敵）は全部ホームランだぜ！！」

秋蘭サイド

「か、夏侯淵様！煌維殿が単身で敵に向かって行きます！」

「なっ！？馬鹿かあの男！一人で何が出来る！？」

部下の報告を受けた私が外を見ると、そこには単身敵と向き合う煌維が居た。

「我が名は煌 蒼光！！人を辞めた外道ども！村を襲いたくばこの俺を倒して行け！！」

勇ましい名乗りを挙げる煌維だが、結局は一人。大軍に飲み込まれるか、逃げ帰って終わりだろう。

「何だコイツ！」

「一人で来やがった！馬鹿か！？」

「構わねえ！殺っちまえー！！」

賊どもが煌維を嘲笑い、怒号を上げて迫り来る。しかし煌維は落ち着いた様子で、おもむろに近くの大木に歩み寄った。

「ウオオオオオオオオ！！リャアアアアアアアアアアアア！！
！！！！」

ドゴオオオオオオッ！！

大木に腕を回した煌維が気合いと共にそれを引き抜く！

「ば、馬鹿な……」

私はその光景に目を疑う。味方の兵達も同様だ。皆が啞然としたまま煌維の行動を見つめていた。

こんな事は季衣でも不可能だ。大木は重いだけではなく地中深くに根を張っているのだ。それを引き抜くなど、切り倒すのとは訳が違う。

そして煌維は大木を振り回して敵を次々に殴り飛ばす。

「まるで暴風だな。」

敵が煌維の大木に巻き込まれては飛んでいく様子を見て私はそう呟く。

「これほどの力が有るならば、頭目を討ってきたというのもあながち嘘ではないのかもしれない。」

三千の敵中に忍び込み、頭目を殺して悠々と帰ってくる。

大木を振り回して単独で敵と交戦する。

どちらも自分の目で見なければ信じられなかっただろう。

「華琳様が欲しがるかもしれんな。」

そう思うと矢を射て追い回したのは失敗だった。本人は気にしてはいないと言うが、勧誘する上では大きな負い目となってしまうた。だがそれもこの戦が終わってから考えるべきだ。今はやるべき事をしよう。

「敵は混乱している！好機だ！弓隊構えろ！！」

私は部下に射撃準備を指示する。

「大木を振るうのは味方だ！間違うなよ！放て！！」

護サイド

「一本足打法！」

ドガアアアアアッ！

「振り子打法！」

バキイイイイイッ！

「バント打法！」

スコン！

先制攻撃は大成功だ。敵は振り回される大木に驚き逃げ惑っている。一度に多数を巻き込めると、見た目にもインパクトが強いのがこの攻撃の良い所だ。

「ひひひひひ！！！」

「お、鬼だああああ！！！」

「失敬な！ホームラン王と言え！」

ヒュン！ヒュン！

ザシュ！ザシュ！

「ぐあっ！」

「げふっ！」

「お？」

敵の陣形が崩れたのを見計らって夏侯淵さんの弓隊が矢を放つ。良いタイミングだ。俺は邪魔に成らない様に大木を担いで自分の持ち場に戻る。

村の南方では楽進達が敵兵を迎撃していた。

「ミサイル発射っ！！」

槍投げのモーションで大木を敵兵の集団に投げ込む。

ズゴーン！

大木に当たり敵が吹き飛ぶ。

「大丈夫か楽進？」

「はい！」

「ここからは持久戦だ。援軍が来るまで耐えるぞ！」

愛刀を抜き俺は敵を迎え撃った。

それから一刻程が経った頃、友軍から歓声上がる。援軍だろうか？

「北より軍勢！旗印は曹です！援軍です！」

俺の予想を肯定するように報告を叫ぶ義勇兵。その声にも明らかな喜色が混ざっている。

援軍が加わり数で勝った俺達は、瞬く間に賊を壊滅させたのだった。

第九話（後書き）

日別アクセス数は、番外編を投稿した日が一番伸びてた。

皆エロスが好きなのね。

第十話（前書き）

これにて村での戦編は終了。

第十話

華琳・一刀サイド

賊の殲滅後、再会した華琳と秋蘭。

「ご苦労だったわね秋蘭。寡兵で良く持ち堪えたわ。」

「いえ…。」

華琳の労いに秋蘭は微妙な態度を取る。その顔には困惑が混じっていた。腹心の表情に違和感を覚えた華琳は首を傾げる。

「浮かない顔ね。どうしたの？」

「はあ…実は今回、私は弓隊を指揮しただけでして、殆どの功績は別の者にあります。私がここへ到着した際には、全ての準備が整った後でした。むしろ称えられるべきは、義勇軍に協力した彼らかと。」

「へえ…秋蘭にそこまで言わせる者が居るのなら会ってみたいわね。」

「ですが、彼らの…いえ、彼の功績は少々異様でして。信じて頂けるかどうか…。」

「異様？」

「はい。煌維と名乗る者なのですが、彼は賊の集結場所に赴き一人

で頭目を討ち取って帰ってきました。現場を目撃した訳ではありませんが、敵の指揮系統がまったく機能していなかった事から、まず間違い無いかと。」

「本当なの？」

秋蘭の報告に華琳は思わず聞き返した。三千余りの敵の中から指揮官を討ち取って、無事に帰って来れるとは考えられない。

「事実です。お蔭で被害はかなり少なくて済みました。戦の準備と作戦の指揮も彼の主導で行われたと聞いています。」

「一刀、聞いた事は？」

隣で話を聞いていた一刀に意見を求める。それ程の人物なら、歴史を知る彼の記憶にも有るのでは無いかと考えたのだ。

「煌維……。いや、知らないな。でもそんなに凄い武将なら無名なのはおかしい。有名に成る前に改名したのか、若しくは偽名なのかも。」

「そうね。その可能性は有るわ。ともかく会ってみましょう。秋蘭、その煌維という者は何処にいるの？」

「おそらくは村に置いた作戦本部に戻っているかと。」

「分かったわ。行きましょう一刀。」

「ああ……お？おっととと！」

一刀は倒れていた大木に足を取られ躓く。

「何だこの大木？」

「ああ。それは煌維が敵に振り回していた大木だ。」

「……。」

二人の脳内で煌維のイメージが、大木を振り回す大男となったのだ。
った。

護サイド

「全員無事だったみたいだな。良かった良かった。」

作戦本部に戻った俺は仲間達と合流し、互いの無事を祝った。

「お兄さんは大活躍だったですねー。風からはお兄さんが敵を追っかけ回している所が見えましたよー。」

「お？風は見たのか？残念ながら私は逆方向だったのでな、護殿の勇姿は見えなかったのだ。ただ護殿の方から逃げて来た賊は格好の餌食だったかな。」

俺達が戦果を話し合いながら談笑していると、本隊へと出向いていた夏候淵さんが人を伴って戻ってきた。一人は何故か学生服の青年。

もう一人は金髪の少女だ。

「貴方が煌維？思ったよりも小柄ね。」

少女の方が俺に話しかける。その態度は居丈高ではなく、自信に満ちているといった方が正しい。

「小柄？」

これでも長身な方なんだけど。

「煌維、こちらが我らの主、曹操様だ。」

「え？そうなの？」

夏侯淵さんの紹介に、改めて少女を見直す。良く見れば確かに、立ち振る舞いには風格を感じさせるものが有る。…ちっこいけど。

「大木で敵を薙ぎ倒していたと聞いていたから、大男を想像していたんだけどね。」

成る程。それで小柄な訳ね。

「初めまして曹操様。名は煌維、字は蒼光です。」

「貴方の活躍は秋蘭から聞いているわ。賊の頭目を討った事もね。」

「まあ、あれは幸運でしたから。」

「謙遜はいいわ。それよりも貴方、私に仕えてみない？」

唐突に切り出す曹操さま。だが困ったぞ。見てみたいと思っただけで、直接話す機会が有るとは考えていなかった。まして勧誘までされるとは。

「凄いですよ煌維殿！曹操様から直々の勧誘なんて！」

「ほんま大出世やで！」

「凄いのー！」

三人娘がやんやとはやし立てて賞賛する。けど雪蓮とも約束があるしなあ。

「曹操様、折角のお話ですけど俺は若輩者ですので、今のところ仕官は考えていません。」

取り敢えず雪蓮の時と同じ対応をしとく。

「あら？義勇軍の指揮と活躍までして、若輩者も無いと思うのだけれど？」

むう、食い下がりますな。

「実は師から見聞を広めるように言われていまして、今はまだ旅の途中なのです。」

母さん口実に使ったろ。

「私に仕えながらでは見聞は広められないかしら？」

「はい。広められません。」

「へえ……言っわね。」

曹操様の目が細く鋭くなる。だが俺も逸らす事無く見返す。辺りは静まり、騒いでいた三人も大人しく行く末を見守っている。

「本当に駄目？」

「駄目です。」

「報酬は弾むわよ？」

「駄目です。」

「高い役職でも？」

「駄目です。」

俺は即答し続ける。

「……閨に誘っても……駄目？」

「……………駄目です。」

フッ……即答……

「出来てませんぞ。」

星、うつさい。

「クス…仕方ないわね…。今回は見逃してあげるわ。でも私は諦め無いわよ?」

えー。

「それより他にも優秀な者達が居ますので、彼女らを取り立ててやって下さい。」

俺は矛先を逸らすために、他の人達を引き合いに出してから場を辞した。

曹操様の獲物を狙う目から逃亡した俺は、気分転換に村を回っていた。

「お…良い匂い…」

香りに誘われて足を向けると、そこでは曹操軍が炊き出しを始めていた。

「そうか。もう夕食の時間だよな。」

見上げた空は僅かに赤らんでいて、夕暮れまでの時間が僅かなのを教えている。

「あ！煌維の兄ちゃん！」

元気な声の主はピンク髪の女の子。許緒ちゃんだ。

「やあ、許緒ちゃん。」

「こんな所でどうしたの？」

「散歩かな。」

君んとこの主人が怖くてね。

「ふーん。あ、そうだ！兄ちゃん戦の時は凄かったね！大きな木で敵をドカンドカンやつつけて。ボクも力持ちな方だけど、煌維の兄ちゃんには負けるよ。」

「ははは。ありがとう。」

「季衣ー！何処だー？」

許緒ちゃんと立ち話の途中、彼女を真名で呼ぶ声が響いた。

「春蘭様あー！こっちです！」

許緒ちゃんが手を振る先には、長い黒髪の女性が居た。何処かで似たような格好を見た気がする。

「ん？誰だお前は？」

駆け寄った彼女は許緒ちゃんの頭を撫でながら、隣に立っている俺を見る。

「煌維だ。宜しくね。許緒ちゃんとは今回の戦で知り合ったんだ。」

「そうか。私は夏侯 惇だ。」

「夏侯？夏侯淵さんの縁者かい？」

「秋蘭は私の妹だ。」

だから格好に見覚えがあった訳だ。

「妹さんには戦場でお世話になったよ。弓隊で上手く支援してくれたからね。」

「はっはっは。そうだろう。秋蘭は自慢の妹だからな。」

自分の事のように嬉しそうに笑う夏侯惇さん。思慮深い夏侯淵さんとは真逆の、快活で明るい性格の女性だ。

「あ、居た居た。」

暫く三人で話し込んでいると、もう一人の訪問者が現れた。夏侯淵さんが連れてきた学生服の青年だ。

「なあ、悪いけど煌維さん、少し良いかい？」

「煌維で構わないよ。そう歳も変わらないんだろう？」

「そうかい？助かるよ。俺は北郷一刀だ。宜しく頼むよ。」

「ああ。宜しくな。んで、何か用かい？」

「それなんだけど……」

自分から話しかけてきた割に言葉を濁す一刀君。

「その…煌維は女性じゃなく、男性が好きなのか？」

「はあ？」

突拍子も無い疑問に思わず聞き返す。まさか彼はソッチ方面の方だろうか？俺は自然と一刀君から距離を置く。

「いや、引かないでくれ。俺もソッチの気は無いから。」

「ホッ……」

予想が外れ安堵する。しかし彼は何故そんな疑問を…？

「不躰な質問で警戒させて悪かったよ。実は華琳が君を諦めていなくてね。女性の誘惑で駄目なら煌維はソッチの趣味じゃないか？なんて言い出してね。不本意ながら俺が話をする事になってしまったんだ。」

「な、成る程……」

要するに勧誘を断った事へのささやかな仕返しといった所だろう。意外に茶目っ気のある人だ。性格が悪いとも言えるけどな。

「君も苦勞しているみたいだな。」

「分かってくれるか…。」

俺の同情に一刀君もしみじみと答える。

彼がこういう言い方をしてくれて良かった。

場合によっては、『ゲイを演じるノンケの男に誘惑される』という面白ワールドを展開するハメになる所だった。

「春蘭様、ソツチってどういう意味ですか？」

隣で聞いていた許緒ちゃんが夏侯惇さんに聞く。

「分からん。おい、北郷。ソツチとは何だ？」

「いや、分からなくて良いから。」

丁度言葉が重なった。

第十話（後書き）

一刀君登場。

蜀だとバッシングの多い彼ですが、アンチを書くつもりはなかったので、一番好感度の良い魏で登場して貰いました。

作者の座右の銘は何処かの隊長と同じ、『皆で幸せになろうよお』なので。

アンチ期待した方はスイマセン。

第十一話（前書き）

次の目的地へ。

第十一話

村は戦の影響でバタバタしていたが、何とか宿を取れた俺は、部屋で一時の安らぎを得ていた。

「お兄さん、居ますかー？」

俺の部屋に顔を覗かせたのは風ちゃんだ。

「どうしたんだ風ちゃん？」

「ご報告に参りましたー。」

「報告？」

「はいー。風と稟ちゃんはこの度、曹操様の下に仕官する事になりましたー。」

「そうか。おめでとう。」

曹操様の目を俺から逸らす為に皆を紹介したのだが、上手く気に入られたみたいだ。少々残念だが俺達四人での旅は、ここで終わりになりそうだ。

「ならここでお別れだね。稟さんにも明日挨拶しておこう。」

「その事ですがー、風としてはお兄さんとも離れたくは無いですよー。お兄さんも風達と来てくれませんかー？」

歩み寄った風ちゃんが俺へと身体を預け、瞳を潤ませて懇願する。

「ウルウル…」

「風ちゃん…」

「はいー？」

「それも曹操様の仕込みかい？」

「あらー？バレちゃいましたかー。」

わからいでか。あの人も、あの手この手と良く考え付くもんだ。自分の誘惑で駄目なら、今度は親しい仲間の誘惑でって魂胆なのだろうけど。

「仕官は断るけど、風ちゃんとはずっと仲間のつもりで居るよ。また会つのも約束する。これじゃ駄目かい？」

「はいー。風としてはそれで十分ですよー。」

風ちゃんは俺の言葉に微笑みながら応えてくれた。

だがその後、稟、楽進、李典、于禁…と明け方まで勧誘紛いの訪問が続くとは思ってもよらなかったのだった。

睡眠妨害とか、地味に嫌な復讐だな。

一夜明け、俺は旅に必要な消耗品と食糧の補給の為に宿を出た。

「あふっ…。」

「遅い起床の割りに眠そうですね。」

「星か。色んな女性が寝かせてくれなかったもんでね。」

「おやおや、護殿は随分な性豪ですね。」

「分かってて言ってるだろ？」

「ククク…。」

図ったように宿の前に現れた星と、挨拶代わりの軽口を交わす。

「星は仕官しないのか？」

彼女は昨夜の勧誘には訪れなかった。

「うむ。確かに誘われはしましたがな。私はどうもあの百合百合しい雰囲気慣れぬので辞退しました。」

「百合？」

「気付いておりませんでしたか？曹操殿と夏侯姉妹、あと北郷殿。あれらはデキておりますぞ。」

マジかよ。

さすがは未来の霸王様。両刀まで使いこなすとは。小人の及ぶ所ではありませんな。

旅の準備を済ませた俺は星と昼食を取る事に。俺達は村に一軒だけある飯屋に入った。

「風と稟も引き上げる曹操殿に付いて行くそうですが、護殿はこれからどうされるおつもりで？」

拉麺を啜る俺に星がそう問いかける。

「んー、陳留に着く前に当初の目的は達成したし、また当分の無い旅になるかな。」

劉備も見てみたいけど特に情報もない。もっと歴史に詳しくれば方針も定まったんだが。

「私は幽州へと赴くつもりですが、護殿も一緒に如何です？」

「幽州？」

「人伝にそこへ旧知の者が赴任したと聞き及びましてな。激励も兼ねて一先ず訪ねてみようかと。」

「星の友人か。何て名前？」

趙雲の知り合いなら、劉備とか関羽かも。

「公孫賛という者です。」

違った。まあ良いか。

「分かった。同行させて貰うよ。引き続き宜しくな。」

「フフツ、こちらこそ。女の一人旅は危険ですからな。しっかりと守って下されよ？」

「もちろんだ。星が危ない時は命懸けで守るぞ。」

「……。」

「ん？どうした？」

「い、いえ……。」

行き先の決まった俺達は、曹操に付いていく五人と別れの挨拶を交わした。

「本当に煌維殿は来ないのですか？」

「悪いな楽進。俺は俺でやる事があるからな。」

「そうですか…。」

「また会える日を楽しみにしておくよ。」

「では、次に会うときは私の事は凧と呼んで貰えますか？」

真名か。この戦いで十分楽進の人となりは見てきた。真名を呼び合うのに不足は無いだろう。

「分かった。そのときは俺も護で良いよ。」

「ズルイで凧いー。兄さん、うちの事は真桜でええよ。」

「沙和もー!」

「分かった分かった。」

三人の真名を受け取る事となった。

「それと兄さん、これ…。」

真桜が手にした棒状の物を俺に手渡す。

「真桜、これはもしかして？」

「そうやで、兄さんが興味持ったうちの発明品や。」

渡されたのは以前に真桜が話していた糸が出る釣竿。所謂リール付の釣竿だ。部品は殆どが木製であるが、仕様は現代の物となんら変わらないように見える。しかしこれを何のヒントも無く一から作成するとは…。

「真桜、お前って本当に天才なんだなあ。」

「そ、そんなに褒められると照れるで…。」

「けど、本当に貰って良いのか？精密だし、かなり手間が掛かったんじゃないのか？」

「ええんや。うちの発明にそない興味持ってくれたんは兄さんが初めてやし。そのお礼や。」

「分かった。ありがたく使わせて貰うよ。練習しておくから、次に出たときには一緒に釣りでもしような。」

「う、うん。それも…ええな…。」

思わぬ贈り物に俺は喜び、仲間との別れを惜しんでいると…。

「あら、もう行くの？」

現れたのは霸王様。

「はい。このまま逗留してると一刀君まで閨に来そうですからね。」

冗談交じりに昨日の事を皮肉る。こっちは貴重な睡眠時間まで削られたんだ。これくらいの嫌味は許して欲しい。

「ふふっ、結局誰にも手は出して無いのね。」

やっぱりこの人の差し金か。

「出してたら、漏れなくそちら側に立って居そうでしたからね。」

「意気地が無いのね。」

「どうしても言ってお下さい。」

「意気地無し。玉無し。能無し。不能。童貞。好色。悪人。変人。
鬼畜。鬼。悪魔。外道。最低。最悪。チビ。デブ。スケベ。不細工。
下品。女たらし。根暗。好事家。男色家。」

グサグサグサ！！

「ぐはあっ！」

本当に言いやがった。しかも一息で言い切るとは、スバラシイ肺活量じゃないか。

「フフフ……。まあ、いいわ。貴方は別の方法で手に入れる事にするから。」

「そうですか。」

諦める選択肢は無いのね。

こうして挨拶もそこそこに、俺達はそれぞれの道へと進んだのだった。

旅仲間は減ったものの順調に旅を続け、偶に賊退治や用心棒をしながら幽州へと入った。

これから俺の旅はどうなって行くのだろうか？

それはまだ誰にも分からない。

だが、俺の新しい人生は前よりもずっと輝いたものに成ると信じている。

頑張れ煌維。

突き進め護。

君の明日は明るい。

真・恋姫無双 在るべき世界へ 「完」

長らくのご愛読ありがとうございました。

「つて、これじゃ読者は納得しないよな。」

「独り言ですかな護殿？」

俺と星はすっかり生業の一つとなった賊退治を終え、岩場に座り休憩していた。

「星、もう幽州には入ったと思うけど、公孫賛さんの住む街まではまだ遠いのか？」

「いえ、もう直ぐ近くまで来ている事は確かですぞ。」

「そりゃ良かった。そろそろ屋根の有る場所で寝たいと思ってたんだ。」

「同感ですな。…ん？あれは…」

「どうした？」

星の見据える先には、馬に乗って近付いて来る集団が居た。

「賊の援軍か？」

「いえ、違います。」

星は集団に近付き、手を振る。

「おい！白蓮殿お！」

「星じゃないか！どうしてここに？」

「どうしてとは失敬な。この辺りに赴任したと聞いて友人が遙々訪ねたというのに。」

「ははっ、相変わらず辛辣だなあ。」

親しげ気に話す二人。彼女が公孫賛だろうか？

「ん？連れが居るのか？」

俺の存在に気付いた女性がこちらに目を向ける。

「私の旅の仲間で煌維殿です。護殿、彼女が公孫賛殿です。」

「宜しく公孫賛さん。」

「呼び辛いだろう？伯珪と呼んでくれ。宜しくな。」

星を介して互いの名前を知った俺達は挨拶を交わす。

「さて、もう少し旧交を温めたかったが、今は賊の討伐に向かう途中なんだ。」

「もしかこの先を根城とする山賊の事ですか？」

「知ってるのか？」

「一足遅かったですな。それならば、既に我らが退治してしまいましたぞ？」

「え？ そうなのか？」

「どうやら俺達と伯珪さんの仕事がかち合ったらしい。一瞬キョトンとした彼女だったが、直ぐに部下を偵察に向かわせ確認を取る。」

「どうやら噂は本当だったみたいだな。」

「噂？」

「賊を退治しながら旅をする夫婦の噂だよ。大木を振り回して敵を叩き潰す夫と、凄まじい槍捌きの妻が居るってね。伝え聞いた風貌から妻の方が星なのは分かったけど、まさか本当だったとはな。」

「調子に乗って他でもやっちゃったんだよなアレ。敵がビビって逃げ出すから楽なんだよ。しかし夫婦って。多分、助けた人が勘違いしてそのまま伝わったんだろう。」

「噂になってたのか。」

「ククク…これで夫婦に間違われるのは二度目ですな。いつそ本当に成ってしまいますか？」

「また、そうやってからかって。」

「まさか俺の故郷まで届いて無いよな？ 母さんが聞いたら狂喜しそう」

なネタだ。見える…ベビー用品を買い揃えて、帰郷を待ち望んでいる両親のヴィジョンが…。

「違うのか？」

「噂になってる二人組みは俺達の事だろうけど、夫婦ってのは噂に尾ひれだよ。」

「成る程な。しかしお蔭で手間が省けた。星とは積もる話も有るし歓迎するよ。」

俺と星は伯珪さんに連れられて、彼女の治める街へと向かった。

第十一話（後書き）

地味っ娘として定評の有るパイパイちゃん登場。彼女と星の出会いは分からなかったので、旧友の設定としました。あしからず。

爆裂「実は俺、ポニーテール萌えなんだ！」

白蓮「私はお前が嫌いだ。」

爆裂「（。；）」

第十二話（前書き）

ストックが切れ申した。

第十二話

「はふう…平和だねえ…。」

「いや、全く…。」

俺と星は伯珪さんの好意でしばらくここに逗留する事になった。今はお茶を飲みながら、戦とは縁の無いマツタリとした時間を過ごしている。

「護殿、お茶請けにメンマは如何か？」

「良いね。丁度口寂しいと思ってたんだ。」

星から進められたメンマを摘みつつ茶を啜る。

「お前ら、寛いでるな…。」

忙しく廊下を行き交う伯珪さんが、俺達を見て溜息を洩らす。その顔は少々お疲れ気味だ。

「伯珪さんの方は忙しそうだね。」

「赴任したばかりだったのも有るんだが、それ以上に前任者が無能でな。そいつの後始末で苦労させられてるよ。」

「それは大変だな。」

「とはいえ、放っておいたら民が困るからな。やらざるを得ないん

だよ。まったく…」

優しい領主さんだ。しかし俺としてもこのまま何もせずに居座り続けるのは心苦しい。

「何か手伝おうか？」

「え？だが煌維は武人だろう？せっかくだけど、今抱えている案件は殆ど領民からの陳情が殆どなんだ。他も農作と商いの問題だからな。」

「いや、父親が村長だったからその辺も多少はかじってたんだ。少しは力に成れると思う。」

「本当か！？助かるよ。それじゃ後で部屋に来てくれ。」

会話を終えると、忙しそうに場を後にする伯珪さん。俺はその背中を見送りながら椅子へと座り直した。

「護殿が村長の子息とは知りませんでしたぞ。」

「言って無かったかな？」

「ええ。ですが、それだけの武を持ちながら知まで有るとは。共に旅して博識なのは分かっていましたが、曹操殿には言わなくて正解ですな。言っておれば、更に勧誘が激しくなっておったでしょう。」

「ゲツ…それは勘弁して欲しいな。」

俺は星の指摘を聞き背筋が寒くなる。

「あれ以上って何があるんだよ。」

「恐らく風を始め、風達までもが一糸纏わず閨に潜り込んで来たのでは？」

「……。」

「フツ、惜しい事をしたと思いか？」

「……んな事無い。」

「間、空け過ぎですぞ。」

「来たよ伯珪さん。」

部屋へと行くと、竹簡やら書簡やらと格闘中の伯珪さんが居た。

「煌維か。取り敢えずこっちに案件を分けておいたから、少しでも減らしてくれば助かる。大した内容じゃ無いんだが、何せ数が多くてさ。」

「了解。」

「済まないな。客分に文官の真似事をさせてしまつて。」

「構わないよ。こっちは世話になってる身分だしな。無駄飯食らいで居るより何か貢献出来た方が気分が良い。」

俺は机の上に仕分けられた案件を一つずつ処理していく。

「まずは領民の陳情か。」

陳情其の一 新婚農夫Aさん

『オラ先日嫁を貰うたんだけど、その嫁が毎夜求めてきて苦勞しとります。このままじゃオラ干乾びてしまつよ。助けてや領主さま。』

「……。これは陳情か？」

むしろチン情ってか？下ネタは自重すべし。

- 回答

『惚気ですかコノヤロー。食事は精の付くものをおすすめします。それと腰を鍛える事も肝要でしょう。ですが仕事に影響の出ないように注意。やり方次第ではご主人が身体を酷使しない方法も有るので、日々研鑽を重ねましょう。』

陳情其の二 最強の人妻Yさん

『最近、息子が旅に出たのだが、私としてはそろそろ孫が欲しい。帰郷の際には嫁の二、三人も連れて帰るのを期待している。しかし息子は奥手な上に鈍感なのだ。何か良い手は無いものだろうか？』

「何だろう？この息子さんに酷く親近感が湧くのは？」

・回答

『息子さんにも自分なりの考えがあるのでしょう。あまり無理に強要しては逆効果です。暖かい目で見守ってあげましょう。くれぐれも…ほんつと、くれぐれも余計な真似は止めて下さい！』

陳情其の三 永遠の漢女Cさん

『最近、ご主人様が冷たいのよう！私が暑苦しい程に迫っても、脱兎の如く逃げ去ってしまうわん。もういつその事……ジュルリ……。』

「どっかで聞いたような口調だな。」

・回答

『多分、彼は恥ずかしがっているのですよ。魅力的過ぎるのも困ったものです（笑）。しかし押し付けるだけが愛情ではありません。ここはさり気無い仕草で気を引いてみましょう。そうすれば逆に彼の方から反応が有るかも。けれど、強引に迫ってはいけません。お互いに（主に彼が）不幸になるだけです。幸運の鍵は忍耐です。百年でも千年でも待つ気構えでいましょう。』

「待ち惚け必至だがな（黒笑）。」

こうして俺は伯珪さんの政務を日暮れまで手伝い、着実に案件を処理して行っただった。

「いやあ、助かったよ煌維。今日は徹夜も覚悟していたからな。これなら何とか忙殺されずに済みそうだ。」

夕食を囲んでいると、伯珪さんから満足気に礼を言われた。

「役に立てて何よりだよ。」

「それにしても農作に関する知識は何処で得たんだ？特に肥料の配合や作物への造詣の深さには感心したぞ。」

「父親が村長の前は元文官だね。手伝う内に自然と身に着いたのさ。」

肥料については、前世で読んだ本『猿でも分かるガーデニング・これで君も農作キング！』が役に立った。とはいえ、三大要素のチッ素・リン・カリウムについてとその供給方法を説いただけだ。

「護殿が働いておるのに私が何もせずでは少々肩身が狭いですな。白蓮殿、何か私にも協力できる事はありませんかな？」

「お？星もやる気だな。そうだな：兵の訓練でも頼むか。星の実力なら申し分無いし。客将扱いで構わないか？」

「うむ。心得た。」

俺に触発されたのか、星も伯珪さんから仕事を請け負う様だ。メンマを箸でつつきながら頷いている。

「なあ星、もう少しメンマは控えた方が良くないか？」

「ああ。私も煌維と同感だな。好きなのは分かるけど、限度が有るだろうに。」

俺達の指摘に、星は心外だとばかりに抗議する。

「何を申されるか二人とも！この何にでも合うメンマの味と歯触り！最高ではありませぬか！？」

器に盛られた大量のメンマを、庇うように抱え込む。

「けど、塩分の取り過ぎは良くないと思うんだ。」

「う、うぐ…」

「夜中に喉が渴いて沢山水を飲むだろう？」

「た、確かに…」

「そして何度も廁に行く。」

「な、何故それを…」

心当たりの有る星は、俺の言葉に顔を引きつらせる。

「どうしてもメンマを断つ気は無いと？」

「然り。メンマを断つなど考えられませぬ。」

「良し！良く言っただ！」

俺は料理人に合図を送り、予め頼んでおいた物を持って来させた。テーブルの上に一つの湯飲みが置かれる。

「護殿、これは？」

「フッフッフ…これは俺が星の為に作ってもらった青汁。まあ、薬湯の様な物だ。」

それも俺の指定した山菜や薬草で作ったオリジナルブレンドだ。効能としては、塩分の吸収を抑えて、排出を促す。しかも各種ビタミンも豊富で美容にも効果の有る優れたものだ。

「な、何やら妙な色すな。」

恐る恐る湯飲みの中を覗き込む星。

「星、この青汁には塩分の取り過ぎを抑える効果がある。メンマを食べるなら一緒にこれを飲むんだ。」

「こ、これを…ですか…。」

「さあ、メンマを断つか、これを飲むか選ぶんだ！」

「くっ！まさか食事の場でこれほどの決断を迫られようとは。拒否権は？」

「無い！断るなら今後、星がメンマを食べるのを全力で阻止させて貰う！」

俺は有無を言わせぬ勢いで言い放つ。

「うぐっ！護殿からかつて無い威圧感が…。」

「さあ！さあ！」

「ええい！ままよ！」

湯飲みを手に取った星は、半ば自棄に青汁を飲み干した。

「グフッ！」

そのままテーブルへと突っ伏す星。そこまでしてメンマを食べたいのか。

隣でそれを見ていた伯珪さんは、その様子にクスクスと笑い声を洩らしていた。

「くっくはは…！あの星が煌維に掛かると形無しだな。くくくっ。」

「笑っている場合かな伯珪さん？」

「へ？」

二度目の合図で、またもテーブルには湯飲みが置かれる。

「こ、煌維、これはもしかして？」

「もちろん伯珪さんにも用意しておいた。」

「私はメンマなんか食べて無いぞ！？」

「知ってるよ。これは疲労回復と滋養強壮、安眠効果の有る青汁さ。疲れている伯珪さんにはもってこいだろう？」

「い、いやでも私はこれが無くても睡眠さえ取れば大丈夫だ。気持ちだけ貰っておくよ。うん。」

何とか青汁を回避しようする伯珪さんにトドメの一言を告げる。

「ついでに言うと、美容にも効くんだよこれ。」

「美容？」

さすがは女性。この言葉には弱かった。

「領民はどう思っかなー？優しいけど吹き出物と染みそばかすだらけの領主様と、優しくて見た目も美しい領主様。俺なら後者を選ぶと思うな！。少なくとも疲労でやつれた顔は見たくないだろう。」

「う、うぐう……」

「さあ！さあ！美人で有能な領主か、不細工で男には見向きもされない領主か選ぶんだ！」

「それは極論だろう！？」

この後、テーブルに二人の女性が倒れ込んだのは言うまでも無い。

「…味に課題有りだな。星の方には味付けに、すり潰したメンマでも混ぜるか？」

「ま、護殿…それはメンマへの冒涇ですぞ…ガクッ…。」

第十二話（後書き）

お待たせしました。やっと出せた星のメンマネタ。

第十三話（前書き）

PVアクセス総数10万超え。こんな駄文にお付き合い下さってありがとうございます。

また番外編やろうかな？

第十三話

俺が伯珪さんの政務を手伝うように成ってから十日程が過ぎた。今では忙しさもピークを過ぎ、領主としての仕事も軌道に乗っていた。

「大分片付いたなあ。」

書類の山が消えた机を満足そうに見渡す伯珪さん。

「これも煌維の手伝ってくれたお蔭だよ。本当にうちで文官をやらないか？」

「ははは。これでも一応本分は武官だからね。遠慮しておくよ。」

「そうか。まあ、言ってみただけさ。気にしなくて良いよ。それよりも…そろそろお互いに真名で呼び合わないか？私としては煌維とは十分に親睦は深まったと思うんだが？」

確かに逗留の間十分に親睦は深まり、俺も真名を預けても良いと思っっている。むしろ遅すぎた位かもしれない。

「構わないよ。真名は護だ。改めて宜しく。」

「ああ。私は白蓮だ。宜しく頼むよ。」

外を見ると、少し空にも赤みが差している。今日の俺達は早めに政務を終えた。

「ご苦労さん。星。」

「うむ、お二人とも今日の仕事は仕舞いですかな。」

二人、部屋を出ると調練を終えた星と出くわした。

「護のお蔭でやっと余裕が出てきたからな。今日は早めに切り上げたんだ。」

「そう褒めなくて良いって。重要な案件は殆ど白蓮がやっただろう？俺は補佐しただけだし。」

「謙遜しなくても護は文官でも食べて行けるだけの知識が有ると思うんだけどな。」

白蓮の褒め言葉に少々むず痒い思いをしながらも、俺は政務に貢献出来た事に満足感を覚えた。

「ほう。ほう…」

そんな俺達の掛け合いを見ていた星が、妖しい笑みを湛えて白蓮の表情を窺う。こういう時の彼女は何か企んでいるのが相場だ。

「お二人はいつの間に真名を許すような関係になったのですかな？」

「そりやお前、これだけ仕事に貢献してくれたんだ。真名位預けても構わないだろ？」

「フフ…しかし、男女が一つの部屋で長時間を過ごし、出てくれば真名で呼び合う…何ぞ勘繰りたくもありませんな。」

「なっ！何を言ってるんだ星！？」

顔を真っ赤に染めて、声を詰まらせる白蓮。完全に星の術中にハマっている。

「溜まった書簡や陳情の整理だ！そんな状況に成るかっ！」

「ほう。」

「ったく。分かったか？」

「成る程…白蓮殿の溜まりに溜まったモノ（仕事）を、護殿の立派なモノ（頭脳）に処理して貰ったと？」

「何でそう表現が卑猥なんだよ！？」

「うん？私の言葉のどの辺りが卑猥だったのですかな？」

「う、うぐっ…」

「白蓮殿が私の言葉で何を想像したのか…よくお聞かせ願いたいですな？」

「し、知るか！」

「ククク…。」

白蓮の狼狽振りに満足しほくそ笑む星だったが、ここで思わぬ逆襲に合う。

「フン！これから二人への礼も兼ねて、私の奢りで飲みに出掛けるつもりだったが、星には必要なさそうだな。」

「むづ…。」

「護、今日は真名を呼び合う事に成った二人の祝い酒に変更するか。」

「フフツ、そうだな。前に兵から聞いた上手いメンマを出す店にも行くか。」

俺も白蓮の提案に乗っかる。

「うぬ…そう来ましたか…。」

折角のタダ酒を飲む機会を、フイにしそうで考え込む星。

「前言撤回すれば白蓮も許してくれるかもよ？」

「前言撤回。」

「「早っ…！」」

「ただけ好きなんだよ酒。いや、メンマか。」

俺達は街へと繰り出し、夕食を兼ねた3人でのささやかな宴会を始めた。

噂通りメンマも美味しく会話弾むので、いつに無く酒が進む。

陽が落ち街に明かりが灯る頃には、既に白蓮は寝息を立てていた。星に勧められて早いペースで飲み続けたのだから無理も無い。

「…うーん…わ、私は決して残念じゃない…。馬面でもないぞ…。」

意味不明な寝言を唱える白蓮。

「もう今夜は引き上げますか？」

「そうだな…。」

俺はそこで用意していた言葉を星に伝える事にした。

「星…」

「言わずとも分かりますぞ。また旅に出るつもりなのでしょう？」

俺の台詞を遮り先回りする星。

「元々護殿がここへ来たのは私に付き合っただけですからな。長く留まる理由も無い。それに白蓮殿の政務も一段落付いたようですし、察しは付いておりました。」

白蓮の仕事は順調だ。最早俺が手伝わなくても対応に追われる事も無いだろう。星の予想通り俺は旅に出るには良い頃合だと思っていたのだ。

「そうか。数日後には出発するよ。」

「ふむ、別段引き止めるつもりはありませんぞ。本来なら既に我らは別れておつても不思議ではない。ただここへと誘ったのは、私がもう少し護殿と共に居たかっただけですからな。」

「星？」

「まだ意味が…分かりませんか？」

そう言った星の顔が急激に俺へと近付いた。同時に唇に当たる柔らかい感触。

「…んっ……」

唇を重ねられた俺の視界は、星の顔で埋め尽くされた。息を吸い込むと酒の臭気と共に、女性特有の甘い香りが鼻孔を刺激する。

それは長い時間では無かった筈だ。だが正確なところは分からない。俺の体感時間を狂わされるほど濃密で衝撃的な事だったからだ。

「…んっ……ハア…如何…でしたかな？私の唇は。」

「…酒よりも酔わされそうだ。」

「フフツ、当然でしょう。私の初めての口付けですからな。」

「俺にとっても初めてなんだけど？」

「ええ…私も酔っておりますよ護殿に…。」

「……。」

臆面も無く答える星の微笑みに、こちらの顔が熱くなるのを感じた。さすがにここまでされて分からなかったら鈍いを通り越して馬鹿だろう。

星が俺の事をか…。いや、全然不足も不満も無い。光栄ですら有ると思うけど。

「別にこれで護殿を引き止めるつもりはありませんよ。ただ、ここに護殿を想う者が居る事を知って頂ければ十分です。旅立つ男を情で引き止めるのは、良い女では無いですからな。」

こちらの表情を読み取った星の言葉は、俺に決断を鈍らせないよう氣遣ったものだった。

「本当に良い女だな星は。」

「おや？些か気付くのが遅いのでは？」

「いや…知ってたさ。最初に会った時からな。」

「ふふ…左様か…。」

戦場で槍を振るう姿も、眠る時の無邪気な顔も、人をからかう時のイタズラっぽい笑みも、今更ながら好ましいものだと思われた。俺達は少しの間、無言ながらも互いの気持ちが通じ合っているような、そんな心地良い時間を過ごした。

「さて、酒も切れた事ですし、私は少し酔いを醒まして帰ります。」
器に残った最後の酒を飲み干し立ち上がる星。

「白蓮殿を頼みますぞ?」

「ん?俺が引きずってくのかコレ?」

「送り狼にでも?」

「成るか?」

告られた直後に別の女性を襲うとか、どんな鬼畜だ。

「もしかして、この機会を作る為に白蓮を酔い潰したのか?」

「はて、何の事やら?」

確信犯だ。

星は飲んだ量の割りに、しっかりとした足取りで店を出て行った。

「まったく…敵わないな。…ほら、白蓮。帰るぞ。」

「だーかーらー！馬面じゃないって！」

「言ってねえよ。酔っ払いめ。」

「馬並みなだねー」

歌い出した。

「馬並みなのよーん」

「女の子が言うんじゃないありません！」

へべれけになった白蓮を部屋まで担いだ俺は、彼女をベッドへと下ろす。

「護ー！水だー！水寄こせー！」

「へいへい…」

横暴な酔っ払いを背にテーブルに置かれた水差しに手を伸ばす。

「…熱い…」

「何、男の前で脱ごうとしてるんだ酔っ払い!?」

振り返った先で半裸になる白蓮。

「なんだよー。悪いかー。ここは私の部屋だぞー!」

「せめて俺が帰ってからにしろ!」

最後の一枚に手を掛ける白蓮と阻止する俺。理不尽に暴れだす白蓮を何とか宥めようとする。

「うるへえー!ならお前も脱げえー!」

「阿呆!引つ張るな!」

不意に腕を引かれた俺は酔いも有ってか不覚にもバランスを崩す。

「てえーい!」

「危なっ!」

ゴスッ!

倒れた拍子にベッドの縁で頭をぶつけ、俺の意識は途絶えた。

「なになっ何で護がここにーっ!？」

朝、気を失っていた俺は白蓮の絶叫によって起こされた。素面に戻った彼女は隣で眠る俺に仰天している。

「ああ…そうか。あのまま寝てしまったんだな。」

俺は昨夜白蓮に気絶させられた事を思い出す。

「わわわ私は一体何を!？」

「取り敢えず落ち着けよ白蓮。」

「これが落ち着いてられるか!まさか本当に護と?酔った勢いでなんて…それにまったく覚えてないぞ!初めてだったのにい!」

パニックに陥る白蓮だが、それよりも優先するべき事がある。

「混乱するのも分かるが、先にやる事があるだろ?」

「や、やる事?」

「服を着ろ。」

「へ?」

改めて自分の格好に目をやる…

「う、うわあああああーっ!」

二度目の絶叫と共に大慌てで胸元を隠す白蓮。彼女は湯気の出そうな程、顔を紅潮させながら身なりを整える。

「うつ…み、見られた…。」

「まあ…それはともかく、昨夜は白蓮が心配している様な事は無かったから気にするな。」

「本当か？」

「ああ。」

俺は昨夜の出来事を白蓮に説明した。

「スマン…私とした事が…迷惑を掛けたな。」

事情を理解し平謝りする白蓮。

「酒の上での出来事だからな。あまり気に病む必要も無いさ。」

「でも…良かった…。いや、惜しかったのか？」

「ん？何か言ったか？」

「何でも無いぞ！それよりお前も早く部屋に帰った方が良い。こんな所を星に見つかったら、何を言われるか分かったもんじゃない。」

「それは言えてるな。」

星とあんな事があつた翌日にこの状況を目撃されては、俺としても立つ瀬が無い。幾ら不可抗力だとしてもだ。

「ですが、もう手遅れですぞ。」

「ゲツ！星！！」

部屋の入り口には既に口元を歪ませた星が立っていた。

「フフ…やりますな。お二方。起きてくるのが遅いと思って来てみれば、こんな愉快な状況に成っているとは。」

「違うぞ星！護とは何もなかったんだからな！」

「クッククク…そう焦らずとも、事情は聞いておりましたよ。」

最初から居たのかよ。大方、白蓮の焦ってるのを見て楽しんでたのだろう。

「ですが白蓮殿、本当に何も無かったのですかな？」

「ど、どういう意味だ！？」

「何も無いというのは護殿の証言だけですぞ？実際は昨夜、白蓮殿の身体を護殿が思う存分に弄んだ後かもしれないぞぞ？」

こいつは…また混ぜっ返すような事を。白蓮も距離を取るな。騙されてるぞ。

「どこか身体に違和感はありませんかな？主に、下半身に。」

「あああ有る訳無いだろ！」

「おや、それは残念。」

「その辺にして置いてやれよ星。」

俺は白蓮をからかう星を窘める。

「護殿にも驚きましたぞ。まさか本当に送り狼になって居ようとは。」

どうやら標的を俺に変えたらしい。誤解されて軽蔑されるよりは、大分マシでは有るのだが。

「しないって。」

「本当ですか？昨日ああ言った手前、次は私の番ではないかと、内心震え上がっているのですが？」

「怯えてる人間はそんな嬉しそうな顔はしない。」

「ははは。バレましたか。むしろ……」

一旦言葉を止め、苦悶する白蓮には聞こえ無いようにこつそりと俺の耳元で囁く。

「むしろ、私ならば閨に來られても歓迎しますぞ……。」

「ばっ！」

星の言葉に絶句する。

「あははは。その様子では本当に唯の事故だったようすな。では、お二人共早く準備されよ。仕事が始まってしまいますぞ。」

俺の動揺から確証を得たのだろう。満足して部屋を出て行く星。余裕の態度が何とも憎らしい。

「けど聞か…。」

昨日の口付けの感触を思い出し自然と頬が緩む。

「どうしたんだ護？アホ面して。」

「アホ言っな。」

第十三話（後書き）

星がヒロインぽくなってしまった。別に良いんだけどね。

第十四話（前書き）

駄文ここに極めり！それでも読んで下さる方に多謝。

第十四話

「世話になったな白蓮。しかも旅支度までして貰って。」

「大した事じゃないさ。むしろ私の方が世話になった位だ。」

出立当日、俺は白蓮の心遣いに感謝していた。数日前に彼女に旅に出る旨を伝えたところ、態々旅の準備まで整えてくれた。おまけに給金だと言って路銀まで。

「護殿に限って心配は不要だと思いますが、道中お気を付けて。」

「ありがとう星。」

そして名残惜しいが星ともここでお別れだ。思えば旅の殆どの間が一緒だった相棒だ。思い出は尽きないが、これからはお互い自分の道を歩む事になる。

「一人旅は寂しいでしょうが、その際は私の唇でも思い出して気分を紛らわせて下され。」

「そうだな。星の笑顔を思い出せば寂しくは無いよ。」

「んむ…。」

俺の思いもよらぬ切り替えしに、星の顔にさっと赤みが差す。

「中々…対応が上手くなりましたな。」

「フフツ、誰かさんに鍛えられたからな。」

逆襲に成功した俺は、隣で話を聞いていた白蓮が何かを言い出す前に出立したのだった。

星・白蓮サイド

「行ってしまったのか…。」

護の背を見送る星。その顔には寂しさと期待の両方が入り混じっていた。

惚れた相手との一時の別れ。そして彼がこれから何を成すのかという期待。その二つを思うと自分も劣らない様に努めなければならないと思う。だが、二人の話を聞いていた白蓮はそんな余韻に浸っては居なかった。

「星！唇って何の事だ!？」

「白蓮殿、それは野暮というもの。男女の会話で唇と言えば、一つしか無いでしょうに。」

「お前達は旅仲間じゃなかったのか？」

「長く旅を続けたからこそ、仲は深まるものですよ?」

「それはそうかもしれないが…いつの間に…」

釈然としない表情の白蓮。星も態々彼女を酔い潰して機会を作ったと教えはしない。

「やけに拘りますな。やはり白蓮殿も惚れておりましたか？」

「ち、違っつて！」

「良いでは有りませんか。白蓮殿は護殿と一夜を共にしたのですから。私などより余程進んだ関係でしょうに。」

「あれは事故だっって言っただろう！？誤解を招く言い方をするなあ！」

「クツクツ…。」

護サイド

「おおっ！これが洛陽かあ。」

星、白蓮と別れた俺が目指したのは、漢王朝の首都である洛陽だっ

た。田舎者の俺としては一度は来てみたかった場所だ。中々に賑わっていて、一人旅で最近人との関わりの少なかった俺にはとても新鮮だ。

地方の修学旅行生か、おのぼりさんの様な観光気分で街並みを歩いていく。

「ここを治めているのは誰だっけ？首都だから有名人だと思ったんだけど……駄目だ。全然思い出せん。というか元々知らないな。前世の記憶が有っても、予備知識が無いから何のアドバンテージにもなりやしない。会ってない有名どころは劉備に關羽、張飛……呂布って何処の陣営だ？」

呂布がすごい武将って事しか知らない。一般人以下だな俺の知識仕方無い。学校通ってればもう少しマシだったんだろうけど、前世では寝たきり生活だったし。ってか学校の授業で三国志は教えるのか？

グウウ…

「おお、何て現金な腹…。」

もう少し街を見て回りたいかったのだが、飯屋を見つけるとほぼ同時に鳴る腹の音。暫く続いた旅で美味しい物にあり付いてなかった俺は、迷う事無く飯屋へと足を運ぶ。

「おっちゃん、拉麺一つ。メンマ大盛りで。」

「あいよー！」

何気に星の影響受けてたりして。

霞サイド

「張遼様！大通りで喧嘩です！」

ウチがお気に入りの酒を買って帰る途中、領民らしき男がその声を掛けてきた。まったく今日は非番なのに、こういう時に限って問題が起きるんや。かと言って放っとく訳にもいかへんのが宮仕えの辛いところやで。

「仕方あらへんなあ。」

騒動を起こした連中に憤慨しながらも、ウチは被害の出ん内に収拾を付けようと現場へと向こうた。

「アレかいな。」

既にそこには人だかりが出来とった。

「ちよいと通してや。」

野次馬を掻き分けて騒動の中心へ向かう。喧嘩は案外規模が大きく、

5、6人の徒党を組んだ者同士が取っ組み合いを始めよった。

「お前ら何しと……」

ドゴッ！！

「ゲフッ！！」

ウチが一喝しようとした矢先、男が一人派手にぶっ飛ばされた。

「だ、誰だてめえ！？」

「何しやがる！？」

口々にぶっ飛ばした人物を恫喝する男達。どうやら喧嘩していた奴らとは別の人間みたいや。喧嘩に横槍を入れられ全員がそいつに敵意を向けた。けど、そんな事は意に介さず、現れた青年は男達に啖呵を切った。

「店先でギヤーギヤー喚くなよ。ズズッ……。消化に悪いだろ。ズルズル……。」

拉麺を啜りながら。

護サイド

昼食を楽しんでいる最中に店先で喧嘩が始まった。無視しようと思
たんだが、どんどん数が増えて騒ぎが大きくなるのでイラついて一
人蹴り飛ばした。それに店の椅子を武器にしようと持ち出したから
な。せめて他人の邪魔に成らないようにして欲しいものだ。

「だ、誰だてめえ!？」

「何しやがる!？」

口々に罵詈雑言を飛ばす男達。喧嘩を中断して矛先を俺に変えたよ
うだ。

「店先でギャーギャー喚くなよ。ズズツ……。消化に悪いだろ。ズル
ズル……。」

俺は拉麺を啜りながら返答する。

「邪魔するんじゃないやねえ!!！」

「この野郎がつ!!！」

襲いくる雑魚の拳を避け、カウンター気味に側頭部を蹴り付ける。
二人目も飛ばした蹴りの戻り際に踵で顎を打つ。

「くっ!!！てめえ……。」

一瞬で二人を倒した事に警戒を強める。

「はいはい。喧嘩は結構。ズズズッ!血気盛んで、持て余す体力を
解消するのには有効だ。ただし人に迷惑を掛けちゃいかんよ。ゴク

ン……」

「うるせえ！！死ね！！」

「というか、拉麺を啜りながら説教すんな！！」

話も聞かず今度は一斉に襲い掛かってきた。俺は高く飛び上がり左右の足で別々の男の顔を蹴る。着地と同時にしゃがむと、頭の上を棍棒が通り過ぎた。そして円を描くように周りの敵の足を払うと、全員が横倒しになる。

ビシッ！

「ヒッ！！」

目に付いた一人の眼前につま先を突き付ける。

「このまま黙って解散するならここまで。まだ続けるなら娼館の出入りも断られるくらい顔を不細工に変えてやろう。」

「わ、分かった！帰る！だから止してくれ。」

「良い子だねえ。長生きしろよ。」

足を下ろすと、フリーガンな皆様は方々に散って行った。

「おい！気絶した奴らも連れて行け。往来の邪魔だぞ。」

「へ？そいつは俺達の仲間じゃ……」

「ああん!？」

「い、いや…分かりました。」

やっと喧嘩が収まった頃、器は空になっていた。俺はもう一度店の暖簾を潜る。

「やっぱり拉麺だけじゃ足りないな。おっちゃん、焼飯追加!」

「おう!しかし兄さん強いんだな!店を守ってくれた礼だ!好きに喰いな!」

「おおっ!ありがとさん!」

俺は店主のおっちゃんの出してくれた焼飯を口にかき込んだ。

霞サイド

「一体何やったんや?あの兄ちゃん。」

拉麺啜りながら出てきたと思ったら、瞬く間に場を治めてしもうた。しかも拉麺の器を持ったまま。中身を零しもせずによ。余程身のこなしが精練されとらんと出来ん芸当やで。ウチに同じ事をやれ言われても多分無理やな。

「ぬふふ…何や面白いもん見付けたで。」

ウチは興味をそそられ、その兄ちゃんを追いつけるようにして店へと入った。

第十四話（後書き）

霞のしゃべりが良くわかんね。

オイは生粋のもっこすなんじゃああああ！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4565s/>

真・恋姫無双 在るべき世界へ

2011年5月31日12時40分発行